



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

学内広報

for communication across today



特集：■アジア・アントレプレナーシップ・アワード 2012

2012.7.25

No. 1427

特集

ASIAN ENTREPRENEURSHIP AWARD 2012

アジア・アントレプレナーシップ・アワード 2012



日本市場は私たちにとって最も重要なマーケットであり、最初に参入する国として日本を選んでいきます。日本のみなさんも当社のサービスに興味を持ってきているし、サービスを受け入れてくれると思っています。
 (WorkLohas Technology Co., Ltd. / 台湾 / George Chiu (CEO))

当社のテクノロジーは人類にメリットをもたらすことができます。日本のヘルスケア関連企業等と今後付き合い、具体的な産業を考えていく中で、たとえ小さな形であっても、世の中に貢献し、発展するための手助けをしたいですね。
 (Clearbridge BioMedics Pte Ltd / シンガポール / Andrew Wu (Project Director))

ハイテク分野における発展に関して、日本からは学ぶところが多いですね。ニューテクノロジーの分野で、今後ますます日本との協力関係を深めていけたらと思っています。
 (Neugent Technologies / フィリピン / David R. Cruz III (Board Director, Co-Founder))



各務茂夫教授
 (ノミネーション委員会
 委員長 / 産学連携本
 部事業化推進部部長)

経済的閉そく感を打破するのは、資本主義の原動力ともいべき創造的破壊と、それに果敢に挑む起業家(アントレプレナー)であり、その意味において、最大の課題は起業家精神(アントレプレナーシップ)とベンチャー企業を創出する起業文化の醸成にあります。また、大学、そして学生が持つダイナミズムが、イノベーションにとって非常に重要であると考えています。

現在、世界各国では、産学官連携によるベンチャー・起業促進プログラムが、これまで以上に推進されており、米国に限らず、欧州や中国、インド、シンガポール等のアジア諸国においても、アントレプレナーシップがイノベーションの要であると位置づけられています。

アジアが、世界におけるイノベーション拠点としてのイニシアティブを発現していくためには、一国内だけに留まらず、成長著しいアジア全

体から、知恵や技術を駆使してチャレンジする若き起業家を呼び込む仕掛けづくりを行い、起業家はもちろんのこと、協賛いただく民間企業から起業支援者まで、創業育成のアジア・ネットワークを構築することが重要です。

Message

若い起業家にとって、世界中から集まった仲間と相互に学びあい、触発し合う刺激的で貴重な体験をすることは、幾多の困難を超えて自らの事業を突き進めるための大きな自信につながっていくのです。

今回の開催にあたっては、本学がリーダーシップをとり、アジア地域

で大学発ベンチャーを推進する大学関係者からなるノミネーション委員が選考したテクノロジーベンチャー企業が一同に会し、大学がイノベーションの源泉として、いかに社会・経済に寄与できるか示されました。

本アワードが、アジア各国との連携による日本主導のイノベーション創造プロジェクトとして、アジアひいては世界のベンチャーキャピタルが集積するベンチャー育成の一大ネットワークの形成を推進し、産官学が一体となったアジアのベンチャー育成・支援の生態系(エコシステム)の構築につながることを願っています。

そして、今回の開催を機に、日本のベンチャーを取り巻く環境がもっと開かれたものになり、国内外の企業が相互に刺激し合うことで、アジア全体の発展へとつながればと強く期待しています。(※P31の関連記事と合わせてお読みください)

(問い合わせ)
 産学連携本部 (本部産学連携課)
 内線: 22857



さらなる経済成長を持続的に遂げるために、国を挙げて強く求められはじめたアントレプレナーシップ(起業家精神)。知の源泉である大学が、イノベーションの源泉としても、イニシアティブを発揮できるのか——。大がかりな仕掛けづくりが必要とされる中、東京大学産学連携本部がリーダーシップをとり、日本発の国際ビジネスコンテスト「アジア・アントレプレナーシップ・アワード2012」(主催:一般社団法人フューチャーデザインセンター/共催:産学連携本部、千葉県等)が、5月9日~11日の3日間にわたり、千葉・柏の葉キャンパス地域で盛大に開催されました。アジア各国・地域の大学関係者等で構成するコミニケーション委員会によって推薦されたアジアのベンチャー企業18社が参加し、ベンチャー支援者によるメンタリング等を経て、ベンチャーキャピタリスト、個人投資家、起業家などが多数参加する中で、英語による事業プレゼンテーションを行いました。「事業の革新性/経済的・社会的影響力」「事業の実行力」を基準に、審査委員会により厳正に審査された結果、優勝、準優勝、第3位、そして、千葉県知事賞が選出されました(受賞者は下記のWINNERS参照)。〈※P31の関連記事と合わせてお読みください〉

小宮山宏 前総長
一般社団法人フューチャーデザインセンター
提唱者/最高顧問、(株)三菱総合研究所理事長



人類史上、非常に大きな変化の時に見舞われている現在、イノベーションが必要とされています。21世紀の特徴を端的な言葉で表すと、①長寿、②人口の飽和によって起こる人工物の飽和、③ITの3つが挙げられます。そして、中国やインドといったアジア諸国の急成長により、世界の特徴が平均化する可能性があります。日本は世界に先んじて、長寿や経済成長を享受し、公害、エネルギー問題におけるかなりの部分を改善・克服してきた結果として、現在では高齢化社会に苦しむなど、世界に先駆けて人類が抱える新しい課題が顕在化しています。先進国における社会状況は、遠からず世界にも波及していくでしょう。その時、必要になるのがイノベーションであり、そして、イノベーションを興し、引っ張っていくのは、新しい起業家たちなのです。このアワードは成功するまで必ず続けます。人類が、それを必要としているからです。記念すべき第1回受賞者の皆さんには、心からおめでとーと言いたい。



ジョン・V・ルース
駐日米国大使

アントレプレナーが雇用を創り出すことからもわかる通り、アントレプレナーシップは新しいテクノロジーの促進といった経済成長に寄与するだけでなく、世界が抱える問題をも解決する。アントレプレナーシップを醸成する環境には、アメリカ政府の強いコミットメントもあり、今後もサポートしていくつもりである。



松本洋一郎
理事・副学長

本アワードが、このように盛大に開催され、成功裏に終えることができたことを大変うれしく思っています。今回の開催が、アジアの多くの国や地域が連携する形で、世界を牽引するイノベーション創出に向けたエコ・システム構築のためのきっかけとなればと願っています。

日本とアジアのベンチャー企業が新風を吹きこむこのプロジェクトが大成功に終わり、心から嬉しく、誇りに思っています。私たちの友情と成功へ向けた大きな第一歩であると認識しています。



森田健作 千葉県知事

The governor of Chiba Prize

3rd Prize

WINNERS

Flexoresearch Group Co., Ltd. (タイ)

ラミネート紙をはじめとしたパルプ、製紙、印刷、包装、廃棄物等のリサイクル技術開発



WorkLohas Technology Co., Ltd. (台湾)

ユーザがウェブページを保存して分類整理、情報発信、共有するソーシャルサービスの提供



2nd Prize



Neugent Technologies (フィリピン)

スマートホーム、スマートオフィス、スマートスクールを実現するデバイスの開発・製造

1st Prize

Clearbridge BioMedics Pte Ltd (シンガポール)

最新鋭マイクロフルイディクス技術を活用した次世代がん診断装置の開発



Transform the World with Asian Entrepreneurship.
アジアの起業家が、世界を変える。

NEWS

一般ニュース

本部奨学厚生課

東京大学光イノベーション基金奨学金平成24年度受給者証書授与式を開催

光科学関連の先端企業8社のご寄附により、産学連携型の特定領域奨学金として、平成20年度に設立された「東京大学光イノベーション基金奨学金」の平成24年度受給者証書授与式が、6月11日（月）に、ご寄附いただいた企業各社の方々のご臨席の下に安田講堂学生部会議室で開催された。

本奨学金は、先端光科学領域の研究に従事する大学院修士課程2年生のうち、特に優秀な者に月額15万円を平成25年3月までの12ヶ月間支給することにより、その学術研究への取組みを支援するものである。

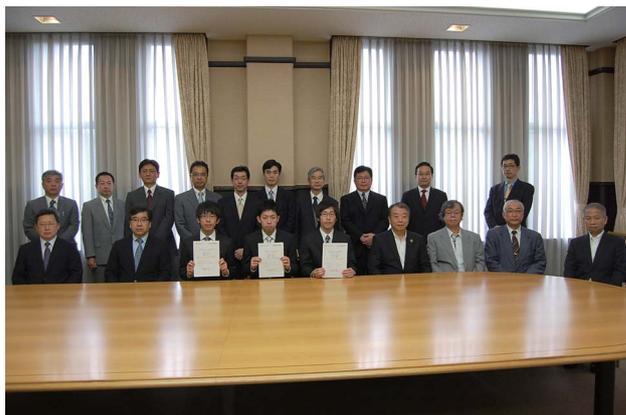
基金へ拠出いただいているのは、ウシオ電機株式会社、オムロン株式会社、オリンパス株式会社、シグマ光機株式会社、日亜化学工業株式会社、浜松ホトニクス株式会社、株式会社ブイ・テクノロジー、富士フイルム株式会社（以上、五十音順）である。

今年度は、研究業績、成績等を厳正に審査した結果、3名が奨学金を受けるにふさわしい特に優秀な者として選考され、武藤芳照理事・副学長から受給者に受給者証書が手渡された。

武藤理事からは、「受給者には、本学のみならず、ご厚意をいただいた企業各社の方々も期待しています。研究に最大限の努力を傾注し、大きな成果をあげていただきたい。また、ご寄附いただいた企業各社には大変感謝しています。本学は今後も教育研究の一層の充実・発展に努力していきます」という旨の挨拶があった。

次いで、企業各社を代表して富士フイルム(株)吉沢勝氏から「奨学金受給者となられたことを祝福するとともに、今後、日本の科学を担う人材として、ご活躍を期待しています。」との祝辞が述べられた。最後に受給者の3人

からは、取組んでいる研究内容の説明、基金拠出企業に対する謝辞とともに、本奨学金受給者としての自覚を持ち、より一層努力していく旨のスピーチがあった。



受給者を囲んでの記念撮影

本部キャリアサポート課

知の創造的摩擦プロジェクト第14回交流会開催

6月16日（土）13時から本郷キャンパス御殿下ジмнаジウムにおいて、知の創造的摩擦プロジェクト第14回交流会「譲れないものはなんですか」が開催された。

知の創造的摩擦プロジェクトは、大規模な「交流会」とより小さな単位で開催する「語る会」及び卒業生の「講演会」の3つの柱で成り立っている。「交流会」は、本学学生と各界で活躍する若手卒業生との交流を通して学生のキャリア形成支援を目指す、大学主催のイベントで、2005年10月に本郷キャンパスにて第1回が開催され、第14回目となった今回は、112名の卒業生と279名の学生が参加した。

開会にあたり武藤芳照理事・副学長から、「知の創造的摩擦プロジェクトの中で最大で根幹をなすイベントである交流会も第14回を迎え、卒業生・学生・大学の三者が協働して運営するユニークかつ面白い企画として学内外から注目を集めている。良い教育体制をつくり、良い人材を送り出すことは大学にとって最も重要な社会的使命である。やりたいこととやるべきことが一致すれば生きがいにつながる。学生一人ひとりがやがて生きがいを感じられるように、本交流会を通して、自分にとって譲れないものが何なのか、おぼろげながらも見つけられることを願っている」と挨拶があった。

第一部では自分が働く上で譲れないものは何かをテーマにグループディスカッションが3回行われ、引き続き17時から同会場において第二部（懇談会）が開かれた。第二部終了の18時30分まで様々な分野で活躍する卒業生と学生との活発な交流が行われた。



武藤理事による開会の挨拶



熱気に満ちた交流の輪



選手宣誓を行う本学運動会ホッケー部の深澤俊主将



演舞を行う本学運動会応援部



演舞を行う京都大学応援団

本部学生支援課

2012年度東京大学京都大学総合対校戦開会式開催される

一般

2012年度東京大学京都大学総合対校戦の開会式が、6月16日(土)安田講堂において開催された。本学からは武藤芳照理事・副学長(大会会長代理)、古田元夫運動会理事長(総合文化研究科・教授)が出席した。

開会に際し、武藤理事と京都大学の赤松明彦副学長(大会副会長代理)から選手たちへの激励がなされた。また、久米晃太大会実行委員長(本学運動会総務部委員長)からは「伝統の重みに押しつぶされずにスポーツを楽しみ、大学スポーツの原点を示そう」との挨拶が、京都大学の峰尾恵人大会副実行委員長(京都大学体育会常任幹事)からは「後輩に誇り、懐かしむことができるような熱い戦いと交流をしよう」との挨拶があった。その後、両大学から盛大な応援演舞の演出があり、式に花を添えた。

開会式後には第二食堂においてレセプションが行われ、両大学の代表者から大会の抱負が述べられ、交流が持たれた。

本大会は伝統ある各部の対校戦を2009年度に総合化したものであり、今年で4回目を迎える。昨年度は接戦の末に敗北を喫しており、本学は雪辱を果たすべく競技に臨む。

本部学生支援課

第63回京都大学・東京大学対校競漕大会開催される

一般

6月17日(日)、東京大学と京都大学の対校ボートレースである通称「京大戦」が、京都大学の主管により瀬田川特設コースにおいて開催された。本大会は、旧制一高・三高対校戦を前身としており、新制大学となった2年目

の昭和 25 年（1950 年）に京大戦として開催されてから 63 回目を迎える伝統の一戦である。男子対校エイトは、これまで東京大学 36 勝・京都大学 25 勝（無勝負 1）という戦績だが、現在、京都大学に 3 連勝を許している。

京都大学主管の大会では、琵琶湖から流れ出る唯一の河川である瀬田川を使用した天然の競技コースを使用し、特に、女子対校クォドルプル、男子オープンフォア、男子対校エイトは、琵琶湖からすぐの地点よりスタートして、下流に向けて S 字に蛇行しながら 3,200m を漕ぎきる厳しいコースとなっている。

前日までの雨もあがり、快晴の下での開催となったが、琵琶湖と瀬田川の水位が上がったことでレース中に瀬田川下流の南郷洗堰が全開放流されることとなった。このため、対校レースのスタートを早めたり、OB レースの一部を中止したりする等、大会運営に大きな変更を余儀なくされた中、増水し、流れが速くなっているコースで、対校レースである医学部対校、女子対校クォドルプル、男子オープンフォア、男子対校エイトが行われた。OB・OG の大きな声援を受けた東大クルーは、善戦したものの健闘及ばず京都大学に勝利を譲った。その他に行われた OB レースでは、東大の勝利が目立った。

閉会式では、武藤芳照理事・副学長が挨拶され、選手及び大会を支えてきたスタッフや OB・OG へ感謝の言葉を述べられた。また、終了後の懇親会では、両校の選手、OB・OG が共に健闘を讃え合った。



熱戦を繰り広げる男子対校エイト

産学連携本部
 一般
 増加する契約事務をよりスムーズに
 研究契約事務担当者向け説明会を開催。

共同研究や受託研究等の増加を背景に、研究契約のスムーズな遂行を図ろうと、6月19日（火）・21日（木）の両日、産学連携プラザで「研究契約事務担当者向け説明会」（主催：産学連携課、協力：知的財産部）を開いた。

各部局の研究契約担当として新しく配属された職員を中心に、ベテラン職員も含め、約 60 名が参加。共同研究契約、受託研究契約、秘密保持契約、成果有体物移転

契約について理解を深めた。今回は特別に、以前より説明事項の要望としてあった知的財産部と東京大学 TLO の役割分担について、知的財産部の小蒲哲夫部長より、「知的財産部は管理主体として、東京大学 TLO は運用主体として、それぞれ本学における知的財産関連業務を担っている」という点などの説明が行われた。参加者は終始、熱心にメモをとるなど、共同研究や受託研究等の増加に伴って増え続ける研究契約事務に対する意識の高さがうかがわれた。

また、説明会後のアンケートには、約 9 割の参加者が回答。ほとんどの参加者から「とても参考になった」、または「参考になった」とのコメントが寄せられたほか、「知的財産部と東京大学 TLO の違いが分かってよかった」といった感想も寄せられた。

実際に研究契約事務を担当している方々からの声を今回の説明会で反映できるよう、要望事項については産学連携課で検討していきたい。



熱心に聴講する参加者の皆さん

本部人事給与課
 一般
 名誉教授の称号授与

6月19日（火）に開かれた教育研究評議会で、東京大学名誉教授称号授与規則により、次の元教授 115 名に名誉教授の称号を授与することになった。

部局	氏名	担当講座等
大・法	馬場 康雄	政治学講座
大・法	北岡 伸一	政治学講座
大・法	森田 朗	政治学講座
大・医	清水 孝雄	生化学・分子生物学講座
大・医	武谷 雄二	産婦人科学講座
大・医	中村 耕三	感覚・運動機能医学講座
大・医	三品 昌美	薬理学講座
大・医	谷口 維紹	免疫学講座

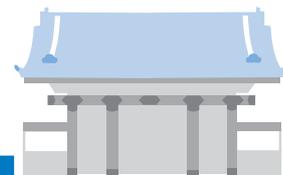
大・医	藤田 敏郎	生体防御腫瘍内科学講座
大・医	岡山 博人	生化学・分子生物学講座
大・医	永井 良三	器官病態内科学講座
大・医	村嶋 幸代	予防看護学講座
大・医	名川 弘一	臓器病態外科講座
大・医	甲斐 一郎	行動社会医学講座
大・工	小林 郁太郎	人工学講座
大・工	笠木 伸英	機械物理工学講座
大・工	鈴木 俊夫	環境システム講座
大・工	久保 哲夫	建築構造学講座
大・工	飯塚 悦功	反応プロセス工学講座
大・工	河内 啓二	航空宇宙システム学講座
大・工	新井 民夫	精密情報システム工学講座
大・工	大久保 誠介	システム俯瞰学講座
大・工	前田 康二	物理実験学講座
大・工	宮田 秀明	調和システム実現学講座
大・工	土井 正男	物理工学講座
大・工	坂本 雄三	建築学専攻建築環境学講座
大・工	岸田 省吾	建築計画学講座
大・文	天野 正幸	哲学講座
大・文	吉田 伸之	日本史学講座
大・文	服部 民夫	韓国朝鮮言語社会講座
大・文	近藤 和彦	西洋史学講座
大・文	尾上 圭介	日本語日本文学講座
大・文	土田 龍太郎	インド語インド文学講座
大・文	西村 清和	美学芸術学講座
大・文	片山 英男	西洋古典学講座
大・文	二通 信子	
大・文	盛山 和夫	社会学講座
大・文	小松 久男	東洋史学講座
大・理	松本 良	地球生命圏科学講座
大・理	神谷 律	動物科学講座
大・理	山本 正幸	生物化学講座
大・理	濱口 宏夫	物理化学講座
大・理	坂野 仁	生物化学講座
大・理	久保野 茂	原子核科学研究センター
大・理	棚部 一成	地球生命圏科学講座
大・理	青木 健一	人類科学講座

大・理	岡村 定矩	広域理学講座
大・理	山形 俊男	大気海洋科学講座
大・農	明石 博臣	獣医学専攻比較動物医科学講座
大・農	寶月 岱造	森林科学専攻森林生命環境科学講座
大・農	宮崎 毅	生物・環境工学専攻地域環境工学講座
大・農	青木 一郎	水圏生物科学専攻水圏生産環境科学講座
大・農	佐々木 伸雄	獣医学専攻病態動物医科学講座
大・農	樋口 廣芳	生圏システム学専攻生物保全学講座
大・農	渡部 終五	水圏生物科学専攻水圏生命科学講座
大・農	太田 明德	応用生命工学専攻生物機能工学講座
大・農	谷口 信和	農業・資源経済学専攻農業構造・経営学講座
大・農	局 博一	獣医学専攻病態動物医科学講座
大・農	生源寺 眞一	農業・資源経済学専攻開発政策・経済学講座
大・済	奥田 央	国際経済講座
大・済	三輪 芳朗	金融経済学講座
大・済	森 建資	企業・市場組織講座
大・養	安達 裕之	複合系計画学講座
大・養	本村 凌二	地中海・イスラム地域文化講座
大・養	池田 信雄	国際コミュニケーション講座
大・養	ROSSITER PAUL	言語習得論講座
大・養	山内 昌之	地中海・イスラム地域文化講座
大・養	黒田 玲子	生命情報学講座
大・養	湯浅 博雄	言語態分析講座
大・養	古矢 旬	附属グローバル地域研究機構
大・養	小宮山 進	機能解析学講座
大・養	三角 洋一	文化コンプレクシティ講座
大・養	玉井 哲雄	情報システム学講座
大・養	林 文代	言語態分析講座
大・養	氷上 忍	複雑系解析学講座
大・養	船曳 建夫	文化人類学講座
大・養	中澤 英雄	国際コミュニケーション講座
大・養	久保田俊一郎	運動適応化学講座
大・養	井上 健	文化コンプレクシティ講座
大・養	山影 進	国際関係論講座
大・育	亀口 憲治	臨床心理学講座

大・育	武藤 芳照	身体教育学講座
大・育	佐藤 学	教職開発講座
大・薬	杉山 雄一	医療薬学講座
数理	神保 道夫	離散数学講座
数理	加藤 和也	数理代数学講座
創域	柳澤 幸雄	地域環境システム学講座
創域	國島 正彦	開発協力講座
創域	神田 順	空間環境学講座
創域	岩田 修一	人間環境学講座
創域	濱野 保樹	人間環境学講座
情理	土肥 健純	知能機械情報学人間機械情報学講座
医科	岩倉 洋一郎	附属システム疾患モデル研究センター分子病態研究分野
医科	山本 雅	癌・細胞増殖部門癌細胞シグナル分野
医科	中村 義一	基礎医科学部門遺伝子動態分野
医科	笹川 千尋	感染・免疫部門細菌感染分野
医科	森本 幾夫	附属先端医療研究センター免疫病態分野
東洋	尾崎 文昭	東アジア研究部門
東洋	鈴木 董	西アジア研究部門
東洋	加納 啓良	南アジア研究部門
社研	田中 信行	比較現代法部門
社研	橘川 武郎	比較現代経済部門
生研	黒田 和男	基礎系部門
生研	岡野 達雄	基礎系部門
生研	渡辺 正	サステイナブル材料国際研究センター
生研	西尾 茂文	機械・生体系部門
宇宙	福來 正孝	宇宙基礎物理学研究部門
物性	八木 健彦	新物質科学研究部門
物性	柿崎 明人	軌道放射物性研究施設
大海研	徳山 英一	海洋底地質学分野
大海研	西田 陸	分子海洋生物学分野
先端	宮野 健次郎	フォトニクス材料分野
先端	小宮山 眞	生命反応化学分野
先端	御厨 貴	情報文化社会分野
生物	山根 久和	環境保全工学部門

平成 24 年度名誉教授称号授与者 115 名

部局 ニュース



大学総合教育研究センター



大学総合教育研究センター・イギリスデ
モントフォート大学主催国際シンポジウ
ム「日英高等教育改革の動向」を開催

4月25日(水)、大学総合教育研究センターとイギリスのデモントフォート大学主催、日本高等教育学会・文教協会後援、IDE 大学協会・日本教育社会学会・ブリティッシュ・カウンシル協賛により、国際シンポジウム「日英高等教育改革の動向」が弥生講堂・一条ホールで開催された。

シンポジウムは、大学総合教育研究センターの劉文君特任研究員の司会で進められ、江川雅子理事、デヴィッド・ワレン氏(駐日イギリス大使)、山中伸一氏(文部科学省審議官)の挨拶に続き、ドミニク・シェラード氏(デモントフォート大学学長)が趣旨説明を行った。第1部では、基調講演1を「イングランドの高等教育改革(学生により高い価値と大きな選択肢を提供)」と題して、マーティン・ドネリー氏(ビジネス・イノベーション・スキル省事務次官)が、基調講演2を、「高等教育改革の日英比較」と題して金子元久氏(筑波大学教授・本学名誉教授・日本高等教育学会長)が行った。第2部では、「日本とイギリスの高等教育改革:共通点と相違点」と題して、小林雅之教授(大学総合教育研究センター)をモデレーターとして、金子氏、シェラード氏、大崎仁氏(IDE 大学協会副会長、元文化庁長官)、ジャック・グローブ氏(タイムズ高等教育誌編集者)を加えてパネル形式で行われた。最後に、吉見俊哉大学総合教育研究センター長から閉会挨拶があった。

高等教育の改革は両国とも最重要な政策課題となっている。その背景には大学進学率の上昇、公財政の逼迫、18歳人口の減少など、両国に共通する要因がある。シンポジウムでは、イギリスでは、1990年代から現在に至るまで絶え間ない大学の改革の連続であり、さらに2011年の政権交代の後、教育白書「学生を中心とするシステム」が発表され、学生に選択権を与えるとともに、ほとんどの大学では授業料をさらに3倍値上げし、大学財政が激変したことが論じられた。とりわけ大学は学生を獲得するために大学間で競争をすることにより、大学の質を向上させることができるといのがこの新政策の眼目であるが、その点について活発な論議がなされた。共通の課題を抱える日英の大学の政策立案者・遂行者・教育関係者が、イギリスの改革案を日本と比較して論じた大変意義のあるシンポジウムであった。参加者は定員を超え、150余名を集めた熱気の溢れたイベントとなった。



「日英高等教育改革の動向」ポスター



古田館長、ソウル大学校朴館長を囲んで

附属図書館
韓国・ソウル大学校との交流に関する覚書を締結

5月23日（水）、韓国・ソウル大学校中央図書館において、東京大学附属図書館とソウル大学校中央図書館両校の関係者の見守り中、古田元夫本学附属図書館長、ソウル大学校朴枝香館長が、「東京大学とソウル大学校の図書館の交流に関する覚書」に調印した。

今回の覚書は、1990年に締結された両校の包括的な学術交流協定に基づき行われるもので、本年2月にソウル大学校で行われた担当者による事前協議を経て合意に至ったものである。

今後この覚書に基づき、両校図書館職員の交流のほか、両校の学生・教職員による資料や施設の相互利用や、学術資料の交換などを行う予定である。

具体的な交流事業については、今後当事者協議によって検討を行うこととなっている。

また、調印当日に行われた懇談の場では、両校がともに計画途中である新図書館建設や、これに伴う寄附金事業、法人化後の図書館運営に関する諸問題など共通する課題について活発な意見交換を行い、今後も両校で情報交換を継続することの重要性が確認された。

本学附属図書館では、新図書館構想においてアジア研究の拠点となるアジア研究図書館の設置を計画しており、韓国などアジア地域の学術情報の重要性が一層増していくなか、ソウル大学校中央図書館との緊密なパートナーシップが発展していくことが期待される。

大学院工学系研究科・工学部
世界展開力による交流事業としてMIT学生が本学を訪問

5月30日（水）、世界展開力交流事業の一端として、MIT-VFT（Very Fast Track：わずか半年で達成する、日本語習得プログラム）の学生たちが本学を訪れ、2週間にわたる夏期集中講義を受講した。

大学院工学系研究科と工学部では、創造性工学プロジェクトM-Skypeを平成23年度冬学期より開講している。M-SkypeはMITの日本語を副専攻とする学生と英語を学びたい本学工学系学生がSkypeを通してLanguage Exchangeをする、つまりそれぞれの母語を教える代わりに学習したい言語を教えてもらうというシステムである。MIT学生と本学工学系学生という環境の似通ったもの同士であり、興味の方角性や研究中心のライフスタイルなどでも共通点が多く、会話のトピックには事欠かない。Skypeというインターネットを通して海外と会話できる通信メディアを利用することによって、費用の心配もなく好きな時間に会話ができる。研究等で不規則な生活や、14時間という時差を乗り越えて、会話のための時間を共有し、昨年10月からの冬学期を通して、学生生活のこと、9月入学についてなどいろいろなテーマで話し合いを重ね、お互いへの理解を深めた。本事業は、MITのVFTという通常2年で行う日本語習得カリキュラムを半年で教えてしまうというプログラムにおいて、その会話相手として協力するということをきっかけに行われた。



M-Skype の授業風景

今年2月には世界展開力による学生の交流事業の一環として M-Skype を受講する工学系研究科生、工学部学生の代表を米国に派遣した。2月20日～25日にサンフランシスコ、ボストンを回り、サンフランシスコでは UC Berkeley で Web-based Educational Tool の評価についてディスカッションを行い、ボストンでは MIT を訪問して M-Skype の交流相手である VFT の学生たちと Language Exchange を行った。普段 Skype を通じて会話している学生たちと対面で会話し、時間の束縛なくいっそうの理解を深めることができた。



MIT での VFT メンバーとの対面

そして、5月30日、MIT-VFT の学生が半年間学んできた日本語学習の集大成を現地で行うため、本学を訪れたわけである。学生たちは、午前中は独自のカリキュラムで日本語を集中的に学習し、午後は本学学生との交流や研究室見学、プロジェクトの調査、市内見学などを意欲的に行った。かねてより M-Skype で交流を重ねてきた本学学生たちがその手助けを献身的に行ったことは言うまでもない。双方の学生にとって得難い経験となった。



三四郎池前での MIT 学生と本学学生

医科学研究所



第39回医科学研究所創立記念シンポジウム開催される

医科学研究所は6月1日に創立45周年、その前身である伝染病研究所の創設から120周年を迎えた。その記念すべき年の医科学研究所創立記念シンポジウムが、6月1日(金)13時から医科学研究所講堂において、「IMSUT GO GO！若い息吹きと新たな医科学への挑戦」のテーマで開催された。

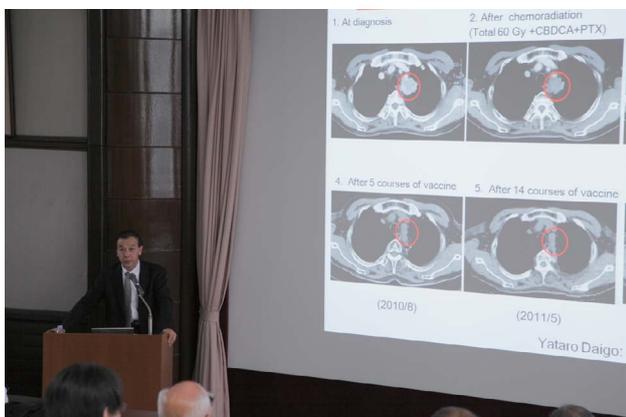
本シンポジウムは、医科学研究所が1967年に伝染病研究所から改組されたのを記念して、1974年から毎年創立記念日の6月1日前後に開催されている。

清野宏所長の開会挨拶に引き続き、感染・免疫部門ウイルス病態制御分野 川口寧教授による「ヘルペスウイルス感染の分子基盤と感染制御への応用」、本研究基礎医科学部門分子シグナル制御分野 武川睦寛教授による「MAPキナーゼシグナルによる細胞運命決定機構と癌におけるその破綻」、先端医療研究センター先端医療開発推進分野 長村文孝教授による「トランスレーショナル・リサーチの開発推進：シーズの花を咲かすように」、先端医療研究センター先端がん治療分野 藤堂具紀教授による「がんのウイルス療法の臨床開発」、大阪大学免疫学フロンティア研究センター 審良静男教授による「自然免疫と炎症応答」、最後に、ヒトゲノム解析センター 中村祐輔特任教授(米国シカゴ大教授)による「ゲノム医科学からがん治療薬の開発を目指して」の、講演がそれぞれ英語で行われた。

講演会場の講堂は、今回も所内外から多くの聴講者を迎えて180の席は満席となり、本シンポジウムへの関心の高さが窺われた。



講演を行う大阪大学 審良静男教授



講演を行う本研究所 中村祐輔特任教授

また、本シンポジウムに先立ち、前日の5月31日（木）13時30分から講堂を会場に、本研究所所属の若手研究者61名による1分間スピーチ「フラッシュトーク」（研究成果発表）が例年通り開催され、若手研究者が熱心に研究成果報告を行うとともに、「研究成果ポスター発表会」が5月31日～6月1日の2日間、2号館講義室でフラッシュトークと連動する形で行われた。



研究成果ポスター発表会会場

大学院法学政治学研究科・法学部
外国人留学生見学旅行を実施

6月7日（木）・8日（金）の2日間、大学院法学政治学研究科・法学部では留学生の伊豆見学旅行を実施した。参加者は、留学生25名、引率の教職員4名の計29名であった。

集合はほぼ時間通りで、曇り空のなか出発予定時刻8時半に大型バスで本郷キャンパスを出発できた。

スムーズな運行で予定通り11時半ごろ中伊豆ワイナリーシャトーT.Sに到着。ワイン醸造工程を見学した後、シャトーレストランでピュッフエランチをお腹いっぱいおいしくいただいた。食後、ブドウ畑を見学したり、ワイングッズショップで土産物を買ったりした。その後、伊豆市指定史跡「土肥金山」に移動し、観光坑道を見学してから温泉砂金採りを体験した。30分間、根気強く受け皿を回しながら余分な砂を流していく作業を続け、中には10個もの砂金を採集した学生もいた。

16時前に、堂ヶ島温泉の海辺に立つ旅館に到着し、夕食までの時間、海辺を散策したり、温泉に入ったり、各自自由に過ごした。夕食は新鮮な旬の素材を活かした伊豆の料理で、留学生たちは鮮魚料理の品々に舌鼓を打った。夕食後は、懇親会で恒例のチーム対抗ゲームを3つ行い、約2時間大いに盛り上がった。

翌朝は、前日の天気とは打って変わって雲一つない晴天で、朝日が海に照り返り黄金の輝きを放っていた。朝食時に見た海辺の景色はまさに絶景だった。9時に旅館を出発し、西伊豆堂ヶ島の「洞窟めぐり」を体験した。前日までは波が荒く欠航だったそうだが、この日の波は穏やかな上に晴天、非常に幸運だった。天然記念物である天窓洞は、天井が丸く抜け落ちてその大きな穴から洞窟内に光が差し込み、エメラルドグリーンの海を美しく照らし、とても神秘的な光景だった。次に、漆喰芸術の美術館「長八美術館」で鏝（こて）絵を見学した後、なまこ壁の街並みを散策した。1時間くらいバスに乗って中伊豆の浄蓮の滝に到着し、昼食後、浄蓮の滝周辺を見学した。帰りの交通も順調で予定どおり17時ごろ大学に到着し、全員笑顔で解散した。

参加者に旅行のアンケートを取ったところ、印象に残ったことは、温泉砂金採りが一番多く、旅館・旅館からの景色、温泉と続いた。日本の美しい自然と文化に触れ、共通の体験を通じて親睦が深まり、楽しく有意義な時間を参加者全員で共有することができた。



長八美術館での集合写真



温泉砂金採りの様子



西伊豆堂ヶ島フェリーの上でハイポーズ

大学院人文社会系研究科・文学部

第3回全学教職員懇話会開催



全学教職員懇話会は教員、職員が一堂に会して、それぞれが個人の立場で意見を述べ、学内教職員の意志疎通を図るとともに親睦を深めることを目的として、平成22年12月9日(木)に第1回「『東大入試』を見つめる。」が、平成23年10月27日(木)に第2回「『東大の秋季入学・卒業』を考える」が開催された。今回の第3回は、6月7日(木)18時から法文2号館一番大教室において、

「東大生の実力」をテーマに、人文社会系研究科の主管により開催され、約80名の出席者が参加した。

中地義和研究科長の開会挨拶、濱田純一総長の挨拶の後、宮岡洋一数理科学研究科教授、村尾美緒理学系研究科准教授、伊藤雄二郎(株)三井住友銀行取締役兼専門執行役員、Coaldrake, W. H 大学院人文社会系研究科特任教授の話題提供があった。東大生の実力について、それぞれ異なる分野からの話題提供は、大変興味深い内容であった。また、今回は、外部からみた東大生の実力ということで、伊藤氏からも貴重なお話をうかがうことができた。話題提供後は、教員及び職員からの意見交換が活発に行われた。アンケート結果では、外部からの話題提供を評価する意見、開催時間が短いなどの意見が複数あった。懇話会終了後は、懇親会が行われ、盛会の中で終了した。



総長による挨拶



説明をする話題提供者(左より Coaldrake 特任教授、伊藤氏、村尾准教授、宮岡教授)



出席者の様子



講演会の一コマ

 部局	大学院教育学研究科・教育学部 臨床心理学コース主催、マイケル・バンバーク教授講演会・ワークショップを開催
--	---

アイデンティティ研究と質的研究方法論の権威である米クラーク大学のマイケル・バンバーク教授来日にあわせ、アイデンティティ理解におけるナラティブ（語り）の利用や分析技法についての講演会・ワークショップが開催された。

6月9日（土）には教育学研究棟にて「“スモール・ストーリー”の分析—アイデンティティの分析にストーリーをどう用いるか」と題された、分析技法に関する小グループ・ワークショップが行われた。参加者は、教育学研究科大学院生を中心とした13名であった。前半の講義の後、バンバーク教授の指導のもとで質的データの分析を参加者自らが体験した。ワークショップは約4時間にわたって行われたが、参加者はワークショップ後もバンバーク教授に質問するなど、熱心な姿勢がうかがえた。

翌日6月10日（日）には、赤門総合研究棟にて「アイデンティティ研究とその分析法の最前線—ナラティブの視点より—」と題された講演会が行われた。首都圏以外からも含め多くの参加希望があり、当日は定員を大幅に上回る100名以上が参加した。講演会の前半は、教育学研究科能智正博教授の司会のもとで、バンバーク教授よりアイデンティティ研究にナラティブを用いる積極的意義と着目すべき視点について講演が行われた。後半では、東京農業大学の鈴木聡史教授と淑徳大学の大橋靖史教授による指定討論が行われ、ナラティブ分析とディスコースの分析の関係等について議論がなされた。今後のアイデンティティ研究の展開を占う上でも、質的データ分析技法を発展させる上でも、またとない機会となったと考えられる。

 部局	生産技術研究所 先進モビリティ研究センター（ITSセンター）ITSセミナーシリーズ17「ITSセミナー in 松山～次世代のモビリティ確保に向けて～」開催される
--	---

6月11日（月）13時より愛媛大学城北キャンパス南加記念ホールにて東京大学ITSセミナーシリーズ「ITSセミナー in 松山～次世代のモビリティ確保に向けて～」を開催した。先進モビリティ研究センターでは、研究成果の社会還元、地域のニーズに即したITS（高度道路交通システム）の普及促進、地域の人材育成、交流を目的としたセミナーを地域のご協力のもと主催しており、前身の先進モビリティ連携研究センター時代から通算して17回を数える。

愛媛大学工学部との共催で開催され、かつ産官学から約250名の方々が出席した本セミナーは、センター長の須田義大教授と愛媛大学理事・副学長の矢田部龍一教授の開会挨拶から始まった。本セミナーは四つのセッションで構成され、第1部では須田義大教授、桑原雅夫教授（センター兼任教授・東北大学大学院情報科学研究科教授）、大口敬教授、大石岳史准教授が、サステイナブルな交通システム、震災時のITS、信号交差点に関する新たな発想、4次元仮想化都市空間とITS等、当センターの先端技術について講演した。第2部は安全安心を担保する持続可能な道路ネットワークをテーマとし、国土交通省四国地方整備局の荻野宏之道路調査官、愛媛県土木部の高橋節哉主幹、国土交通省松山河川国道事務所の志々田武幸所長が、四国における道路整備の状況、愛媛県における道路管理の現状、道路の情報化の取組について講演した。高齢化社会に向けたITS技術をテーマとした第3部では、松山市消防局の村上和昭副主幹、高知検診クリニック脳ドックセンターの朴啓彰センター長（高知工科大学地域交通医学研究室長）、愛媛大学工学部の神野雅文教授が、松山市消防局・救急搬送の現状と課題、脳ドックを用いた運転脳力検査、運転者への不快要因の低減のための技術について講演した。第4部は高齢化社会におけるITSへの期待をテーマとしたパネルディスカッション（モデレータ：愛媛大学工学部の吉井稔雄教授）

が行われ、桑原教授、久万高原町の高野宗城町長、西日本高速道路株式会社四国支社の松本晃一副支社長、愛媛大学医学部の谷川武教授が、災害時の交通・救命救急、高齢ドライバーに関する課題について熱く語った。

本セミナーは愛媛新聞にも掲載されるなど地域社会の高い関心を集め、大盛況のうちに終了した。特に、本セミナーでは既存の ITS 分野を超えた医学分野の観点からの議論も行われ、元々学際的研究分野である ITS の新たな展開が期待される。



センター長の須田義大教授（左）、愛媛大学の矢田部龍一教授（右）



須田義大教授の講演とセミナーの様子

東洋文化研究所

部局

東文研にてプリンストン大学グローバルセミナー始まる！

米国のプリンストン大学では学部生向けに世界各地で夏季セミナー（プリンストン大学グローバルセミナー）を開講しており、今回は本学東洋文化研究所で実施することになった。

このセミナーは本学とプリンストン大学間の教育協力を進展させ、日本に関連した課題に関する講義、議論を通じて両大学の学生間の交流を深め、双方の学生が国際的な素養を深めることを目的としている。

セミナー初日の6月11日（月）には、伊藤国際学術研究センター2階のファカルティクラブにて、江川雅子理事出席のもと、セミナーを受講するため来日した学生

たちの歓迎レセプションが開催された。

今回のセミナーは、引率の David R. Leheny 教授のもと、14名の学生が6月9日（土）から約6週間、日本に滞在する。テーマは“Hope As the New Normal: Tokyo after the Disaster”で、3.11以降日本が経験した震災からの復興に焦点を当て、日本の戦後復興から現代に至るまでの日本の政治、外交、社会、経済、文化等に関連づけて、震災後の政策課題を考察するプログラムとなっている。

今後、プリンストン大学の学生たちは、5泊6日で東北地方の被災地等を訪問するプログラムを取り交え、日本語、日本文化を学んで帰国する。



プリンストン大学、David R. Leheny 教授の挨拶



6月11日に行われた歓迎レセプションの風景



本学文学部学生とプリンストン大学学生の交流の様子。右端は世話役の佐藤仁准教授

大気海洋研究所

海洋・沿岸・大気科学—ハワイ大学・ 東京大学合同シンポジウム

1991年以來、大気海洋研究所とハワイ大学海洋・理工学部との間では協定に基づき交流が盛んに行われている。2008年3月に東京大学で開催された第1回合同シンポジウムを受けて、第2回合同シンポジウムは、6月13日（水）～15日（金）にハワイ大学マノア校の会議場 East West Center で開催された。2008年の第1回合同シンポジウムでは生物系の研究者間の交流が主だったが、第2回は、大気海洋研究所の3つの研究系（気候システム、海洋地球システム、海洋生命システム）から教員12名、ポスドク・学生13名の総勢25名が参加した。ハワイ大学からもそれぞれの専門領域に対応する研究者や学生の参加を得て、大気海洋科学全般を網羅するシンポジウムとなった。また、事務部からも3名が同行し、本シンポジウムの運営を行うとともに、ハワイ大学側の理工学部事務担当者や短期留学生室長、外国人向けの正規コースや教養講座をもつ Outreach College の担当者と事務担当者間交流も行った。

最初の2日間は、「海洋・大気の相互作用と気候変動、海洋生物学と生態系立脚型管理、環境適応の生理学と微生物学、海洋動態と生物地球化学」についてのオーラルセッションと、ポスターセッションが実施された。本シンポジウムは研究発表だけでなく、ハワイ大学と大気海洋研究所の共同研究の促進と交流も目的であったため、ポスター発表者も事務担当者も、各自の研究や関心のある事柄について壇上にて英語で発表した。3日目の午前中には、それぞれの研究分野や研究グループに分かれての分科会が実施された。午後にはハワイ大学の Sea Grant College Program による教育プログラムが実施されているハナウマ湾自然保護区を視察し、実際にハナウマ湾に生息する生物を観察した。過剰な観光客の訪問により破壊が進んだ同湾の生態系を再生しつつ、教育の場として活用する取り組みは印象的なものだった。第3回目は柏キャンパスの大気海洋研究所で開催予定である。このような定期的な交流を通して、研究や教育面での成果が生まれることが期待される。



ハワイ大学マノア校 East West Center 前にて

大学院工学系研究科・工学部

工学系等地震訓練が行われる

6月19日（火）昼休みに、工学系等（工学系研究科、情報理工学系研究科、工学部、VDEC）において地震訓練が実施された。地震訓練は、大規模地震発生時の対応行動を訓練することを目的に、全員参加で実施され、教職員、学生など約2500人が参加した。工学系等では、平成11年度から毎年度行われており今回で14回目の実施となる。今年度は、新たな試みとして、一部の号館で職員証や学生証のICを利用した安否確認（点呼）訓練を実施した。

11時55分に緊急地震速報のチャイム音の斉放放送により訓練が始まった。まずは緊急地震速報が放送されたときの対応。地震の強い揺れが到達するまでの短い間に身の安全を確保することが重要であるが、研究室等では、棚の転倒や落下物による危険性の少ない「一時退避場所」を設定し、そこへ移動して身の安全を確保した。揺れがおさまったら、火の始末、そして避難路を確保した。続いて、工学系等災害対策本部からの指示により、各号館に対策部が設置されるとともに号館ごとに指定された避難場所への避難が開始された。この間、号館対策部は対策本部へ被害状況や避難状況を報告し、本部では連絡を受けた内容を記録係がボードに記入することにより、全体の状況を把握した。各避難場所では安否確認訓練が行われ、安否確認用紙、ICカード、名簿等により各建物からの避難者数の把握が行われ、最後に、本部長の原田昇工学系研究科長、本郷消防署員の講評が斉放放送で参加者に伝えられ、家具類の転倒・落下・移動防止対策実施の重要性等が伝えられた。この訓練を、今後の地震時の対応力向上に活かしたい。

今年度は文京区に防災教室の実施を依頼し、訓練終了後に起震車と煙ハウスの体験を開催した。台風が近づく中で行われたため、予定の時間よりも大幅に短縮しての実施であったが、阪神淡路大震災などを再現した揺れを体験することができ好評であった。特に、地震の少ない国からの留学生には興味深い体験のようだった。



ICカードによる安否確認



備蓄品の配布



起震車体験の様子

情報基盤センター

部局

ボスニア・ヘルツェゴビナ国の情報教育関係者が本学の教育用計算機システムを見学

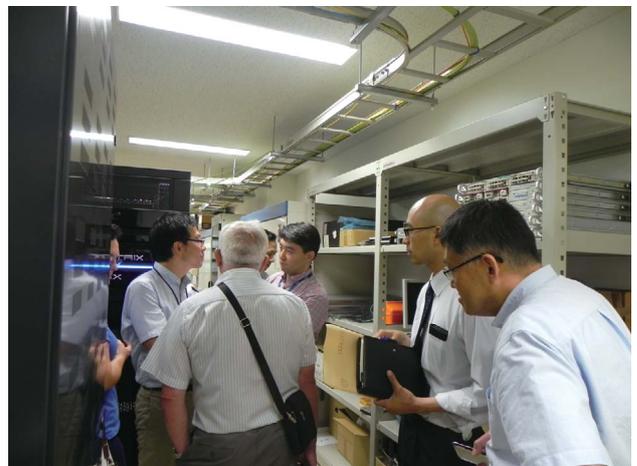
6月19日(火)に、来日中のボスニア・ヘルツェゴビナ国の情報教育関係者が、JICA「ボスニア・ヘルツェゴビナ国IT教育近代化プロジェクト」のプログラムの一環として、日本の高等教育機関での情報教育の現状を視察するため、本学の駒場キャンパス教養学部情報教育棟を訪問し、設置されている教育用計算機システム(以下、ECCS2012)などを見学した。

最初に、柴山悦哉教授よりECCS2012を含む本学の情報基盤の概要説明が行われ、続いて関谷貴之助教、丸山一貴助教によるシステムの説明およびデモンストレーションと質疑応答が行われた。その後、参加者は、教育研究用端末が多数配置されている演習室やサーバー室を見学した。

見学終了後も参加者は熱心に当センター教員へ質問を行い、議論を交わしていた。



ECCS2012の説明の様子



サーバー室の見学の様子



見学終了後も議論を交わす様子

大学院人文社会系研究科・文学部

部局

外国人留学生・外国人研究員等との懇親会開催される

6月21日(木)18時から、山上会館地下食堂において、恒例となっている大学院人文社会系研究科・文学部主催

の外国人留学生・研究員及び外国人スタッフとの懇親会が開催された。

懇親会には、人文社会系研究科及び文学部に在籍する17カ国の外国人留学生・研究員、留学生博士論文作成支援ボランティア・ネットワークである「三金会」の先生方及び教職員の計99名が参加した。

初めに中地義和人文社会系研究科長・文学部長から挨拶があり、続いて鶴岡賀雄国際交流委員会委員長の発声で乾杯した後、懇談が始まった。

途中には「三金会」の先生を代表して、久野猛氏から活動状況等をふまえた心温まるご挨拶をいただいた。

また、恒例となっている留学生のパフォーマンスタイムでは、韓国の金大榮(キム デヨン)さんの歌の熱唱と、ロシアからの留学生によるロシア漫才の披露があり、参加者からは歓声が沸き上がっていた。

懇親会は終始和やかな雰囲気につつまれて進み、最後に留学生を代表して、博士課程に在籍している中国の徐曉紅(ジョー ギョウコウ)さんから大変流暢な日本語で、ユーモアを交えながらの挨拶があった。

なお、今回は留学生有志により、普段からの交流を企図した文学部・人文社会系研究科留学生・学生交流会の発足の提案があり、賛同者の参加を募ることになった。

普段は研究活動に忙しい学生・研究員も、この日ばかりはそれぞれのお国の言葉と日本語を混ぜながら、お国自慢を語り合い友好を深め合う楽しいひと時を過ごし、20時頃盛況のうちに散会した。



出席者全員による記念撮影



ロシア漫才(左から 狂言回し役のスマルノフ パベルさん、マフニョワ ダリアさん、ザベレジナヤ オリガさん)

キャンパス ニュース



本部キャリアサポート課

キャンパス

平成23年度学部卒業者及び大学院修了者の就職状況

学部卒業者は3,204人、そのうち就職者は1,026人(32.0%)、非就職者は2,178人(68.0%)。非就職者の大半が大学院進学者(1,634人)で、卒業者数に対する大学院進学者数の比率は51.0%と就職者数の比率32.5%を上回っている。

大学院修士課程修了者は3,017人、そのうち就職者は1,637人(54.3%)、非就職者は1,380人(45.7%)。非就職者のうち大学院博士課程への進学者等は777人である。

大学院専門職学位課程修了者は385人、そのうち就職者は115人(29.9%)、非就職者は270人(70.1%)。

大学院博士課程修了者(満期退学者を含む)は1,660人、そのうち就職者は918人(55.3%)、非就職者は742人(44.7%)。

なお、日本学術振興会の特別研究員等是非就職者としてカウントしてある。

表1-1 学部卒業者の就職状況

表1-2 修士課程修了者の就職状況

表1-3 専門職学位課程修了者の就職状況

表1-4 博士課程修了者の就職状況

表2-1 学部卒業者の卒業後の状況

表2-2 大学院修了者の修了後の状況

表3 就職状況の推移(過去10年間)

参考 産業別就職者数の推移(平成18~23年度)

表1-1 平成23年度学部別卒業者の就職状況

平成24年5月1日現在

区分	学部別	医学部		工学部	文学部	理学部	農学部		経済学部	教養学部	教育学部	薬学部	合計	比率(%)	昨年度比率(%)	
		法学部	医学				健康・看護	農学								獣医学
学部卒業生数(A)		437 (81)	102 (16)	19 (12)	997 (101)	352 (105)	318 (34)	244 (57)	37 (17)	343 (52)	154 (64)	110 (44)	91 (23)	3,204 (606)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		204 (39)		9 (7)	97 (15)	209 (64)	13 (2)	62 (16)	25 (13)	267 (46)	65 (29)	71 (33)	4 (1)	1,026 (265)	32.0 (43.7)	32.5 (43.8)
その他(A-B)		233 (42)	102 (16)	10 (5)	900 (86)	143 (41)	305 (32)	182 (41)	12 (4)	76 (6)	89 (35)	39 (11)	87 (22)	2,178 (341)	68.0 (56.3)	67.5 (56.2)
その他の内訳	学部再入学等	4 (1)			3	1	5 (1)	3		6	3 (1)		6 (1)	31 (4)	1.0 (0.7)	1.0 (1.1)
	大学院進学	163 (31)	4 (1)	4 (2)	719 (59)	75 (21)	266 (25)	171 (39)	8 (3)	41 (4)	72 (31)	33 (9)	78 (18)	1,634 (243)	51.0 (40.1)	56.1 (42.5)
	臨床研修医		79 (13)											79 (13)	2.5 (2.1)	2.7 (2.6)
	上記以外	66 (10)	19 (2)	6 (3)	178 (27)	67 (20)	34 (6)	8 (2)	4 (1)	29 (2)	14 (3)	6 (2)	3 (3)	434 (81)	13.5 (13.4)	7.7 (9.9)

() 内は、女子を示し内数である。

表1-2 平成23年度大学院(修士課程)研究科別修了者の就職状況

平成24年5月1日現在

区分	研究科別	人文社会系	教育学	法学政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学	医学系		薬学系	数理科学	新領域創成科学	情報理工学系	学際情報	合計	比率(%)	昨年度比率(%)
										保健学	医科学								
課程修了者数(A)		127 (49)	96 (47)	20 (8)	85 (15)	221 (90)	339 (55)	935 (115)	281 (92)	50 (39)	31 (12)	80 (17)	43 (1)	434 (105)	192 (12)	83 (24)	3,017 (681)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		35 (17)	44 (19)	7 (2)	46 (10)	84 (32)	152 (35)	640 (76)	193 (60)	17 (11)	2 (1)	40 (10)	17	189 (33)	138 (5)	33 (6)	1,637 (317)	54.3 (46.5)	59.9 (50.9)
その他(A-B)		92 (32)	52 (28)	13 (6)	39 (5)	137 (58)	187 (20)	295 (39)	88 (32)	33 (28)	29 (11)	40 (7)	26 (1)	245 (72)	54 (7)	50 (18)	1,380 (364)	45.7 (53.5)	40.1 (49.1)
その他の内訳	学部再入学等	2 (2)			2	3 (3)	1	3 (1)	2 (2)	1 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	1	2 (2)	2	23 (14)	0.8 (2.1)	0.6 (1.0)
	博士課程進学等	74 (26)	32 (19)	9 (3)	27 (3)	96 (33)	146 (16)	135 (12)	66 (21)	13 (11)	23 (8)	38 (6)	19	67 (17)	29 (2)	3	777 (177)	25.8 (26.0)	31.6 (35.1)
	上記以外	16 (4)	20 (9)	4 (3)	10 (2)	38 (22)	40 (4)	157 (26)	20 (9)	19 (16)	4 (2)	1	6	177 (55)	23 (3)	45 (18)	580 (173)	19.2 (25.4)	7.9 (13.1)

() 内は、女子を示し内数である。

表1-3 平成23年度大学院(専門職学位課程)研究科別修了者の就職状況

平成24年5月1日現在

区分	研究科別	法学政治学	工学系	医学系	公共政策学	合計	比率 (%)	昨年度比率 (%)
		法曹養成	原子力	公共健康				
課程修了者数(A)		242 (82)	17	28 (13)	98 (29)	385 (124)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		6 (3)	16	12 (6)	81 (23)	115 (32)	29.9 (25.8)	28.9 (21.0)
その他(A-B)		236 (79)	1 (0)	16 (7)	17 (6)	270 (92)	70.1 (74.2)	71.1 (79.0)
その他の内訳	学部再入学等			1	1 (1)	2 (1)	0.5 (0.8)	0.7 (0.0)
	博士課程進学等	2 (1)		6 (2)	1	9 (3)	2.3 (2.4)	2.9 (5.1)
	上記以外	234 (78)	1	9 (5)	15 (5)	259 (88)	67.3 (71.0)	67.5 (73.9)

() 内は、女子を示し内数である。

表1-4 平成23年度大学院(博士課程)研究科別修了者の就職状況

平成24年5月1日現在

区分	研究科別	人文社会系	教育学	法学政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学		医学系		薬学系	数理科学	新領域創成科学	情報理工学系	学際情報	合計	比率 (%)	昨年度比率 (%)
									農学	獣医学	保健学	医学								
課程修了者数(A)		142 (50)	46 (24)	27 (13)	22 (5)	180 (72)	190 (41)	336 (55)	143 (52)	17 (7)	48 (40)	213 (59)	59 (15)	19 (1)	133 (37)	60 (7)	25 (8)	1,660 (486)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職者数(B)		56 (9)	24 (11)	17 (7)	21 (5)	82 (29)	133 (23)	199 (26)	78 (29)	10 (4)	31 (23)	137 (30)	42 (13)	17 (1)	34 (10)	33 (4)	4 (2)	918 (226)	55.3 (46.5)	40.3 (39.1)
その他(A-B)		86 (41)	22 (13)	10 (6)	1 (0)	98 (43)	57 (18)	137 (29)	65 (23)	7 (3)	17 (17)	76 (29)	17 (2)	2 (0)	99 (27)	27 (3)	21 (6)	742 (260)	44.7 (53.5)	59.7 (60.9)
その他の内訳	学部/大学院再入学等	4 (2)				5 (1)	3	1	1		1 (1)	2		1	1 (1)			19 (5)	1.1 (1.0)	1.3 (1.6)
	臨床研修医																	0 (0)	0.0 (0.0)	0.3 (0.4)
	上記以外	82 (39)	22 (13)	10 (6)	1 (0)	93 (42)	54 (18)	136 (29)	64 (23)	7 (3)	16 (16)	74 (29)	17 (2)	1 (0)	98 (26)	27 (3)	21 (6)	723 (255)	43.6 (52.5)	58.2 (58.6)

() 内は、女子を示し内数である。
博士課程満期退学を含む。

表2-1 H23年度学部卒業者の卒業後の状況

平成24年5月1日現在

	平成23年度卒業者	進学者数			就職者数																				臨床研修医	その他	合計	
		大学院研究科	他の学部等への進学	小計	A 農業、林業	B 漁業	C 鉱業、採石業、砂利採取業	D 建設業	E 製造業	F 電気・ガス・熱供給・水道業	G 情報通信業	H 運輸業、郵便業	I 卸売業・小売業	J 金融業・保険業	K 不動産業、物品賃貸業	L 学術研究、専門・技術サービス業	M 宿泊業、飲食サービス業	N 生活関連サービス業、娯楽業	O 教育・学習支援業	P 医療、福祉	Q 複合サービス事業	R サービス業	S 公務	その他の企業等				小計
法学部	437 (81)	163 (31)	4 (1)	167 (32)	0	0	0	0	22 (2)	4	19	10 (2)	10 (2)	45 (11)	2	4 (1)	1	3 (2)	3	0	6 (2)	2 (2)	63 (11)	10 (4)	204 (39)	0	66 (10)	437 (81)
医学部 (医学科)	102 (16)	4 (1)	0	4 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	79 (13)	19 (2)	102 (16)
医 (健康総合科学科)	19 (12)	4 (2)	0	4 (2)	0	0	0	0	1 (1)	0	0	1 (1)	0	3 (1)	0	0	0	1 (1)	3 (3)	1 (1)	0	0	0	0	10 (8)	0	6 (3)	20* (13)
工学部	997 (101)	719 (59)	3	722 (59)	0	0	0	2	35 (3)	2	16 (2)	4 (2)	2 (1)	9 (2)	0	1	0	0	1	0	4	4	10 (2)	8 (3)	98 (15)	0	178 (27)	998* (101)
文学部	352 (105)	75 (21)	1	76 (21)	2	0	2	5 (1)	31 (9)	2 (1)	37 (9)	6 (1)	9 (2)	37 (12)	5 (2)	3 (2)	0	12 (4)	8 (5)	2	5	10	18 (9)	15 (7)	209 (64)	0	67 (20)	352 (105)
理学部	318 (34)	266 (25)	5 (1)	271 (26)	0	0	0	0	1	0	4	0	0	3	0	0	0	1 (1)	1 (1)	0	0	0	1	2	13 (2)	0	34 (6)	318 (34)
農学部	244 (57)	171 (39)	3	174 (39)	2	0	0	1	8 (3)	0	7 (1)	0	3 (1)	16 (3)	0	0	0	0	2	0	4 (2)	2 (1)	12 (4)	5 (1)	62 (16)	0	8 (2)	244 (57)
農・獣医学	37 (17)	8 (3)	0	8 (3)	1	0	0	0	10 (4)	0	0	0	0	2 (2)	1	0	0	0	4 (3)	3 (2)	0	0	3 (2)	1	25 (13)	0	4 (1)	37 (17)
経済学部	343 (52)	41 (4)	6	47 (4)	0	0	0	2	34 (8)	5 (1)	30 (3)	3	32 (3)	94 (17)	3	22 (4)	1	0	3	0	1	2 (1)	31 (7)	7 (2)	270 (46)	0	29 (2)	346* (52)
教養学部	154 (64)	72 (31)	3 (1)	75 (32)	0	0	0	0	10 (6)	2	8 (1)	2 (1)	4 (2)	12 (8)	0	2	0	1 (1)	2 (2)	0	4	1	9 (4)	8 (4)	65 (29)	0	14 (3)	154 (64)
教育学部	110 (44)	33 (9)	0	33 (9)	0	0	0	0	12 (5)	1 (1)	4 (1)	4 (1)	2 (1)	12 (4)	1 (1)	2 (2)	0	1 (1)	10 (7)	1	3	1 (1)	13 (6)	4 (2)	71 (33)	0	6 (2)	110 (44)
薬学部	91 (23)	78 (18)	6 (1)	84 (19)	0	0	0	1	2 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4 (1)	0	3 (3)	91 (23)
(学部) 合計	3204 (606)	1634 (243)	31 (4)	1665 (247)	5	0	2	11 (1)	166 (42)	16 (3)	125 (17)	30 (8)	62 (12)	233 (60)	12 (3)	34 (9)	2	19 (10)	37 (21)	7 (3)	27 (4)	22 (5)	161 (45)	60 (23)	1031 (266)	79 (13)	434 (81)	3209 (607)

1. () 内は女子で内数。

2. *は就職かつ進学した者を含む。(就職かつ進学した者は、「進学者数」と「就職者数」の双方に示す。)

表2-2 H23年度大学院修了者の修了後の状況

	平成23年度修了者	進学者数										就職者数										臨床研修医	その他	合計							
		左記のうち満期退学者	大学院研究科	他の学部等への進学	入学者	専修学校・外国の学校等	小計	A 農業、林業	B 漁業	C 鉱業、採石業、砂利採取業	D 建設業	E 製造業	F 水道業	G 電気・ガス・熱供給・水道業	H 情報通信業	I 運輸業 郵便業	J 卸売業・小売業	K 金融業・保険業	L 不動産業 物品賃貸業	M 学術研究、専門・技術サービス業	N 宿泊業、飲食サービス業				O 生活関連サービス業、娯楽業	P 医療、福祉	Q 複合サービス事業	R サービス業	S 公務	その他の企業等	小計
人文社会系	修	127 (49)	74 (26)	1 (1)	1 (1)	76 (28)	0	0	0	1	7 (3)	0	4 (1)	0	0	0	0	1	2 (2)	0	1 (1)	8 (7)	0	0	3 (1)	7 (3)	2 (1)	36 (18)	0	16 (4)	128* (50)
	博	142 (50)	89 (36)	0	0	4 (2)	4 (2)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	31 (5)	0	0	20 (3)	0	0	3 (1)	1	0	56 (45)	0	82 (39)	142 (50)
教育学	修	96 (47)	32 (19)	0	0	32 (19)	0	0	0	4 (1)	0	4 (2)	1 (1)	3	0	0	0	1	0	0	20 (9)	0	0	2 (6)	8 (1)	2 (20)	45 (20)	0	20 (9)	97 (48)	
	博	46 (24)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (1)	0	0	20 (8)	3 (2)	0	0	0	0	24 (11)	0	22 (13)	46 (24)	
法学政治学	修	20 (8)	9 (3)	0	0	9 (3)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	2	0	0	1	0	0	7 (2)	0	4 (3)	24 (8)	
	博	27 (13)	20 (12)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	0	0	9	0	0	0	0	0	17 (6)	0	10 (6)	27 (13)
	専	242 (82)	2 (1)	0	0	2 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	2 (2)	1 (1)	6 (3)	0	234 (78)	242 (82)	
経済学	修	85 (15)	27 (3)	0	2	29 (3)	0	0	0	2	0	2	0	0	0	30 (7)	0	9 (3)	0	0	0	0	0	1	0	2	0	46 (10)	0	10 (2)	85 (15)
	博	22 (5)	10 (2)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8 (5)	0	0	13	0	0	0	0	0	0	21 (5)	0	1 (1)	22 (5)
総合文化	修	221 (90)	96 (33)	1 (1)	2 (2)	99 (36)	0	1	0	1	23 (9)	0	23 (7)	2 (1)	2	4 (3)	0	4	0	1	7 (4)	3 (2)	2 (4)	4 (4)	3	6	86 (33)	0	38 (22)	223* (91)	
	博	180 (72)	96 (42)	5 (1)	0	5 (1)	0	0	0	0	5 (1)	0	5 (2)	0	1	3	0	38 (18)	0	1 (1)	28 (7)	0	0	2	2	85 (30)	0	93 (42)	183* (73)		
理学系	修	339 (55)	146 (16)	0	1	147 (16)	2 (1)	0	2	1	57 (14)	4 (1)	25 (5)	1	6 (2)	12 (3)	1	8	0	2	8 (1)	5 (2)	0	0	16	6 (3)	156 (35)	0	40 (4)	343* (55)	
	博	190 (41)	35 (11)	3	0	3 (0)	0	0	0	0	18 (3)	0	5 (1)	0	0	1	0	38 (4)	0	0	66 (13)	1 (1)	0	2 (1)	2 (1)	1	134 (23)	0	51* (18)	191 (41)	
工学系	修	935 (115)	135 (12)	0	3	138 (13)	0	0	6	49 (13)	325 (30)	19 (2)	58 (4)	24 (1)	9 (2)	32 (8)	8 (2)	22	1	3	6 (3)	12 (2)	10 (6)	38 (4)	20 (7)	643 (47)	0	157 (26)	938* (116)		
	博	336 (55)	60 (8)	1	0	0	1	0	1	5 (4)	53 (4)	1	4 (1)	2 (1)	0	2	0	53 (8)	0	0	71 (11)	0	1	5 (1)	1 (26)	199 (26)	0	136 (29)	336 (55)		
	専	17	0	0	0	0	0	0	0	3	9	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	16 (0)	0	1 (0)	17 (0)	
農学生命科学	修	281 (92)	66 (21)	0	2	68 (23)	1	1	0	7 (2)	86 (27)	1	20 (5)	5 (3)	12 (1)	7 (1)	0	6 (2)	1	1	7 (2)	6 (4)	5 (1)	3 (8)	17 (2)	9 (60)	195 (60)	0	20 (9)	283* (92)	
	博	143 (52)	33 (14)	0	0	1 (1)	0	0	0	2 (4)	11 (4)	0	1 (1)	0	1	0	0	14 (5)	0	0	43 (18)	0	0	1 (1)	3 (2)	78 (29)	0	64 (23)	143 (52)		
	獣	17 (7)	2 (2)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3 (1)	0	0	4 (2)	2 (1)	0	0	0	0	10 (4)	0	7 (3)	17 (7)	
医学系	修	81 (51)	36 (19)	1	2	39 (21)	0	0	0	2 (1)	0	2 (1)	0	0	0	0	1 (1)	0	0	3 (3)	6 (2)	0	1 (1)	0	0	3 (2)	19 (12)	0	23 (18)	81 (51)	
	博	48 (40)	10 (10)	1	0	1 (1)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6 (5)	0	0	14 (12)	10 (6)	0	0	1 (1)	0	32 (24)	0	16 (16)	49* (41)	
	医	213 (59)	25 (6)	1	1	0	2	0	0	0	7 (2)	0	0	0	0	0	0	8 (3)	0	0	66 (15)	54 (9)	1	0	0	1 (30)	137 (30)	0	74 (29)	213 (59)	
薬学系	修	80 (17)	38 (6)	1 (1)	0	39 (7)	0	0	0	29 (8)	0	0	0	1	0	1	0	3 (2)	0	0	1	1	1	1	2	0	40 (10)	0	1 (17)	80 (17)	
	博	59 (15)	5 (2)	0	0	0	0	0	0	22 (7)	0	0	0	0	0	1 (1)	0	3	0	0	13 (5)	2	1	0	0	0	42 (13)	0	17 (2)	59 (15)	
数理科学	修	43 (1)	19	0	1	20 (1)	0	0	0	0	0	7	0	0	8	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	17 (0)	0	6 (1)	43 (1)	
	博	19 (1)	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	2	0	2	0	11 (1)	0	0	0	0	0	17 (1)	0	1 (1)	19 (1)	
新領域創成科学	修	434 (105)	67 (17)	0	1	68 (17)	0	0	0	6 (12)	83 (12)	4	35 (2)	2	4	8 (1)	0	13 (9)	0	1	6 (1)	3	1	7 (6)	13 (1)	5 (1)	191 (31)	0	177 (55)	436* (105)	
	博	133 (37)	38 (10)	0	0	1 (1)	0	0	0	0	8 (1)	0	7 (1)	0	0	0	0	9 (4)	0	0	5 (1)	2 (1)	1 (1)	1	0	1 (10)	34 (10)	0	98 (26)	133 (37)	
情報理工学系	修	192 (12)	29 (2)	0	2	31 (4)	0	0	0	44	1 (63)	2	63 (2)	1	1 (3)	0	2	0	2	0	3	2	0	1	4	2	139 (5)	0	23 (3)	193* (12)	
	博	60 (7)	12 (2)	0	0	0	0	0	0	8 (1)	1	9	1	0	0	0	2 (2)	0	0	12 (1)	0	0	0	0	0	0	33 (3)	0	27 (3)	60 (7)	
学際情報	修	83 (24)	3	1	1	5 (0)	0	0	0	0	5 (1)	0	18 (3)	0	1 (1)	1	0	0	0	2	1	0	1	2	1	1	33 (6)	0	45 (18)	83 (24)	
	博	25 (8)	14 (2)	0	0	0	0	0	0	1 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3 (1)	0	0	0	0	0	4 (2)	0	21 (6)	25 (8)	
公共政策	専	98 (29)	1	0	1	2 (1)	0	0	0	1	8 (1)	0	3	1	2	16 (7)	1	10 (4)	1 (1)	1 (1)	0	0	2	3	26 (7)	6 (2)	81 (23)	0	15 (5)	98 (29)	
	修	3017 (681)	777 (177)	5 (3)	18 (11)	800 (191)	3 (1)	2	8	65 (15)	667 (106)	29 (3)	261 (32)	37 (6)	39 (26)	118 (4)	73 (21)	11 (4)	23 (1)	2 (4)	14 (31)	73 (8)	24 (3)	38 (10)	109 (29)	55 (15)	1653 (321)	0	580 (173)	3033 (685)	
(大学院)	博	1660 (486)	452 (159)	11 (2)	2 (3)	6 (5)	19 (5)	0	0	1	7 (24)	2 (5)	32 (5)	3 (1)	5 (1)	9 (1)	0	223 (63)	0	1 (1)	398 (103)	74 (20)	3 (1)	8 (4)	14 (4)	8 (3)	923 (228)	0	723 (255)	1665 (488)	
	専	385 (124)	9	1	1	11 (4)	0	0	0	1	12 (1)	9	3	1	2	16 (7)	1	12 (5)	1 (1)	1 (1)	5 (2)	6 (2)	2	5	30 (9)	8 (4)	115 (32)	0	259 (88)	385 (124)	

1. () 内は女子で内数。
 2. 「修」は修士課程、「博」は博士課程及び「専」は専門職学位課程を示す。
 3. 農学生命科学研究科のうち、「博」は博士後期課程を、「獣」は獣医学博士課程を示す。
 4. 医学系研究科のうち、「博」は博士後期課程を、「医」は医学博士課程を示す。
 5. 修了者数には、退学後論文を提出して学位を授与された者と満期退学者を含む。
 6. *は就職かつ進学した者を含む。(就職かつ進学した者は、「進学者数」と「就職者数」の双方に示す。)

表3 就職状況の推移（過去10年）

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
学部卒業者数	3,380	3,416	3,250	3,298	3,264	3,228	3,093	2,983	3,142	3,204
就職者数	1,103	953	948	1,069	1,120	1,071	997	915	1,021	1,026
卒業者数に対する就職者数の比率（％）	32.6	27.9	29.2	32.4	34.3	33.2	32.2	30.7	32.5	32.0
非就職者数	2,277	2,463	2,302	2,229	2,144	2,157	2,096	2,068	2,121	2,178
卒業者数に対する非就職者数の比率（％）	67.4	72.1	70.8	67.6	65.7	66.8	67.8	69.3	67.5	68.0
修士課程修了者数	2,673	2,711	2,719	2,732	2,865	2,884	2,933	2,982	2,948	3,017
就職者数	1,368	1,334	1,380	1,503	1,665	1,673	1,725	1,743	1,765	1,637
修了者数に対する就職者数の比率（％）	51.2	49.2	50.8	55.0	58.1	58.0	58.8	58.5	59.9	54.3
非就職者数	1,305	1,377	1,339	1,229	1,200	1,211	1,208	1,239	1,183	1,380
修了者数に対する非就職者数の比率（％）	48.8	50.8	49.2	45.0	41.9	42.0	41.2	41.5	40.1	45.7
専門職学位課程修了者数				271	380	399	427	435	412	385
就職者数				82	92	112	118	108	119	115
修了者数に対する就職者数の比率（％）				30.3	24.2	28.1	27.6	24.8	28.9	29.9
非就職者数				189	288	287	309	327	293	270
修了者数に対する非就職者数の比率（％）				69.7	75.8	71.9	72.4	75.2	71.1	70.1
博士課程修了者数	1,371	1,532	1,458	1,547	1,619	1,575	1,613	1,573	1,582	1,660
就職者数	591	586	537	631	567	723	727	591	637	918
修了者数に対する就職者数の比率（％）	43.1	38.3	36.8	40.8	35.0	45.9	45.1	37.6	40.3	55.3
非就職者数	780	946	921	916	1,052	852	886	982	945	742
修了者数に対する非就職者数の比率（％）	56.9	61.7	63.2	59.2	65.0	54.1	54.9	62.4	59.7	44.7

参考 学部卒業者及び大学院修了者の産業別就職者数の推移(平成18年度～平成23年度)

		農業、林業	漁業	鉱業、採石業、砂利採取業	建設業	製造業	電気、ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業、郵便業	卸売業・小売業	金融業・保険業	不動産業、物品賃貸業	学術研究、専門・技術サービス業	宿泊業、飲食サービス業	生活関連サービス業、娯楽業	教育・学習支援業	医療、福祉	複合サービス事業	サービス業	公務	その他の企業等	合計
18年度	学部			5	13 (3)	153 (33)	21 (4)	159 (46)	38 (4)	66 (21)	280 (54)	15 (2)		2 (1)		21 (8)	2 (2)	2	182 (57)	137 (34)	24 (6)	1,120 (275)
	修士	3 (1)		7 (1)	59 (11)	710 (112)	39 (6)	210 (29)	46 (8)	39 (4)	159 (26)	12 (2)		2 (1)		46 (14)	5 (4)	33 (4)	172 (59)	104 (25)	19 (4)	1,665 (311)
	専門職学位			0		6 (1)	7 (4)	7		1	16 (7)	2		1		5		2	16 (5)	26 (7)	3	92 (24)
	博士			1	5 (1)	151 (27)	1	24		6 (3)	13 (2)					163 (45)	72 (28)	7 (1)	90 (24)	24 (3)	10 (2)	567 (136)
19年度	学部	1 (1)		1	12 (3)	164 (44)	17 (2)	151 (49)	28 (5)	80 (24)	263 (58)	20 (6)		0		22 (10)	6 (3)	4 (1)	143 (40)	146 (35)	13 (4)	1,071 (285)
	修士			2	64 (14)	747 (132)	37 (3)	192 (37)	43 (4)	44 (7)	172 (20)	14 (6)		1		36 (15)	12 (8)	24 (5)	186 (54)	56 (11)	43 (14)	1,673 (330)
	専門職学位				1	8 (1)	7 (1)	5 (1)	1	3	17 (7)	2 (1)				5 (2)	3 (1)		17 (5)	38 (9)	5 (3)	112 (30)
	博士				9 (1)	127 (15)	4	23	2	1 (1)	16 (2)	1 (1)				240 (52)	62 (22)	178 (46)	12 (5)	22 (5)	26 (10)	723 (160)
20年度	学部			1	19 (2)	151 (29)	24 (6)	123 (52)	31 (3)	81 (18)	210 (40)	11	119 (28)	3 (1)	12 (3)	38 (10)	4 (2)	6	33 (6)	114 (35)	17 (5)	997 (240)
	修士	5 (3)		6 (1)	54 (12)	730 (130)	40 (2)	209 (46)	51 (6)	48 (6)	171 (28)	6 (1)	102 (34)	1 (1)	5 (1)	67 (29)	11 (7)	33 (8)	76 (16)	93 (22)	17 (5)	1,725 (357)
	専門職学位				1 (1)	5 (1)	7	14 (8)	1	2 (1)	20 (2)		12 (3)			7 (3)	7 (3)			37 (11)	5 (3)	118 (36)
	博士				2	141 (14)	5 (1)	34 (3)	1	3	9 (3)	1	138 (33)			254 (44)	86 (24)	5	10 (2)	15 (3)	23 (1)	727 (128)
21年度	学部	5 (1)		3 (1)	11 (3)	126 (26)	24 (6)	135 (40)	37 (10)	48 (13)	188 (40)	15 (4)	82 (24)	5 (2)	6 (3)	34 (13)	8 (5)	7 (2)	15 (7)	148 (37)	18 (4)	915 (241)
	修士	4 (2)		5 (1)	61 (14)	720 (134)	51 (9)	230 (52)	55 (6)	48 (6)	134 (16)	9 (1)	137 (43)	3 (1)	12	48 (15)	23 (17)	17 (7)	34 (11)	114 (25)	38 (13)	1,743 (372)
	専門職学位					6 (1)	6 (3)	9 (3)	3	3 (1)	13 (3)		9 (7)			3 (2)	12 (4)			38 (12)	6 (1)	108 (34)
	博士	1			9 (1)	129 (23)	5	25 (5)			8 (1)		83 (29)		2 (1)	197 (64)	72 (18)	4 (2)	5 (1)	33 (10)	18 (4)	591 (158)
22年度	学部	2 (1)		1	10 (5)	148 (38)	19 (7)	134 (42)	43 (10)	95 (25)	220 (49)	22 (5)	62 (15)	3 (1)	11 (3)	23 (10)	11 (6)	14 (5)	24 (7)	160 (38)	21 (4)	1,023 (271)
	修士	2		11	79 (16)	683 (118)	61 (6)	254 (44)	43 (4)	42 (4)	140 (17)	7 (1)	142 (46)	4	9 (2)	58 (30)	27 (16)	20 (5)	29 (12)	122 (29)	32 (8)	1,765 (358)
	専門職学位				13 (4)	10	8 (3)			2 (1)	17 (6)		11 (1)			3 (2)	9 (4)		2 (1)	40 (10)	4 (1)	119 (29)
	博士	1 (1)	1	1	9 (1)	119 (17)	2	36 (4)	3	4 (2)	3		131 (31)		1	210 (84)	70 (24)	3 (2)	10 (2)	18 (3)	15 (4)	637 (175)
23年度	学部	5		2	11 (1)	166 (42)	16 (3)	125 (17)	30 (8)	62 (12)	233 (60)	12 (3)	34 (9)	2 (1)	19 (10)	37 (21)	7 (3)	27 (4)	22 (5)	161 (45)	60 (23)	1,031 (266)
	修士	3 (1)	2	8	65 (15)	667 (106)	29 (3)	261 (32)	37 (6)	39 (6)	118 (26)	11 (4)	73 (21)	2 (1)	14 (4)	73 (31)	25 (8)	24 (3)	38 (10)	109 (29)	55 (15)	1,653 (321)
	専門職学位				1 (1)	12 (1)	9	3	1	2 (7)	16 (7)	1	12 (5)	1 (1)	1 (1)	5 (1)	6 (2)	2	5 (1)	30 (9)	8 (4)	115 (32)
	博士			1	7	135 (24)	2	32 (5)	3 (1)	5 (1)	9 (1)		223 (63)		1 (1)	398 (103)	74 (20)	3 (1)	8 (1)	14 (4)	8 (3)	923 (228)

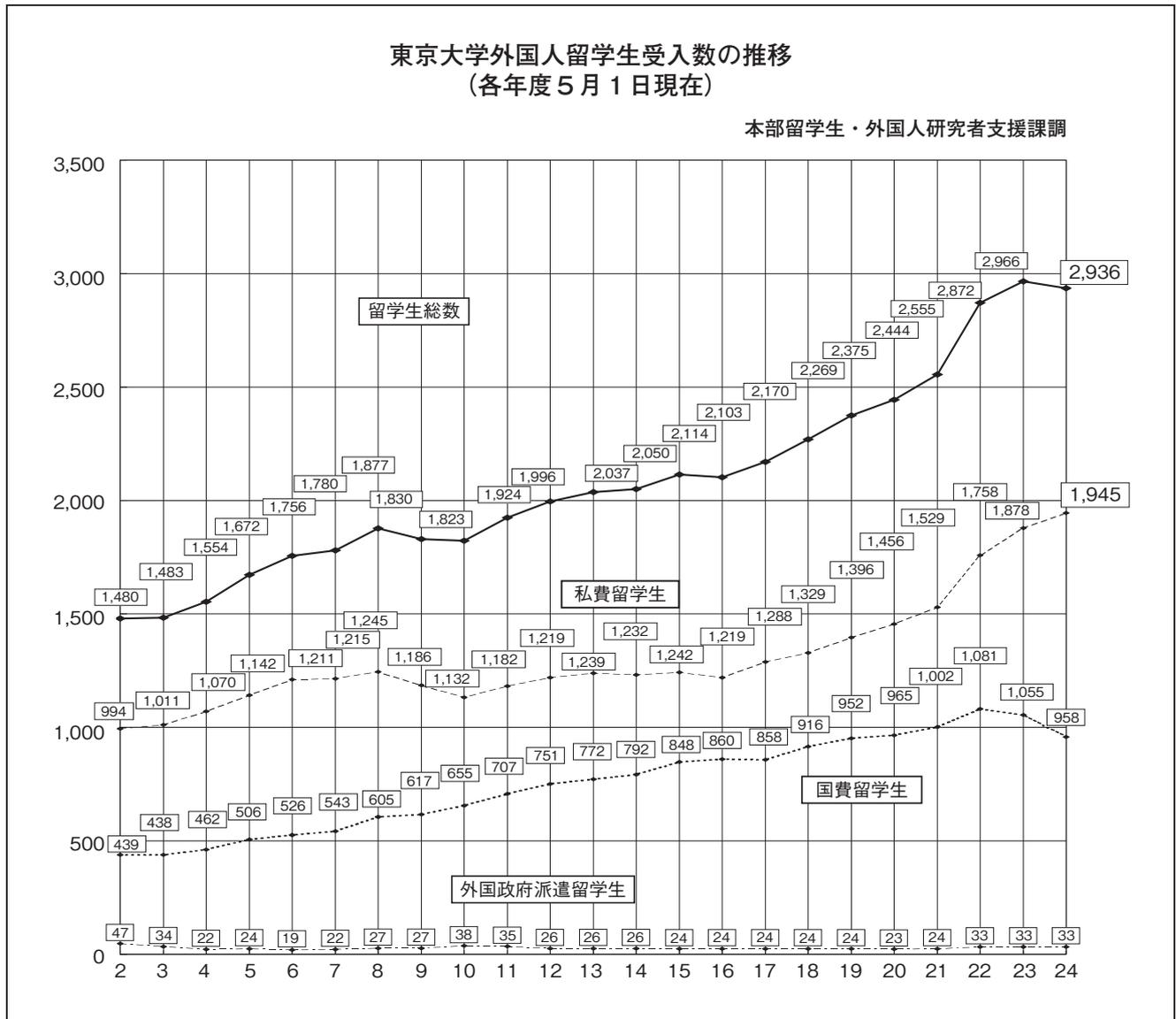
※ 平成18年度及び平成19年度のサービス業には、学術研究、専門・技術サービス業及び生活関連サービス業、娯楽業を含む。
()内は女子で、内数である。



本部留学生・外国人研究者支援課

平成 24 年度外国人学生数－国費外国人留学生数 958 人、私費外国人留学生数 1,945 人、外国政府派遣留学生数 33 人、その他の外国人学生（在日外国人学生）数 299 人－

本学では、毎年 5 月と 11 月の年 2 回、同月 1 日現在の外国人学生数を調査している。これをもとに各年度 5 月 1 日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、本年 5 月 1 日現在の外国人学生数は次頁以降のとおりである。



全学生数に対する外国人留学生数の比率

事 項	A 全学生数 (人)	B 日本人学生数 (人)	C 外国人留学生 (人)	C/A 比 率	平成23年度 比 率
学部レベル	14,155	13,759	256	1.81%	1.94%
大学院レベル	14,187	11,348	2,680	18.89%	18.58%
計	28,342	25,107	2,936	10.36%	10.33%

※全学生数欄には「その他の外国人学生」（在日外国人学生）を含む。

※学部レベル学生数（全学生数及び外国人留学生数）には、学部特別聴講学生25名を含む。

※大学院レベル学生数（全学生数及び外国人留学生数）には、大学院特別聴講学生49名を含む。

※研究所に所属する研究生14名は、大学院レベル学生数（全学生数）に含む。

そのうち7名は、外国人留学生数にも含む。

※比率欄の数は四捨五入。

平成24年度外国人学生数

平成24年5月1日現在

区 分	学部				大学院								研究所等		合 計			
	学生		研究生等		修士課程		専門職学位課程		博士課程		外国人研究生等		大学院研究生				研究生	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国費 (a)	54	39	0	0	150	97	7	5	310	185	66	45	0	0	0	0	587	371
	93		0		247		12		495		111		0		0		958	
外国政府派遣 タイ	5	5	0	0	2	2	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	11	7
	10		0		4		0		4		0		0		0		18	
外国政府派遣 マレーシア	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	0		0		1		0		0		0		0		0		1	
外国政府派遣 シンガポール	3	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1
	4		0		1		0		0		0		0		0		5	
外国政府派遣 韓国	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1
	8		0		0		0		0		0		0		0		8	
外国政府派遣 アラブ首長国連邦	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	1		0		0		0		0		0		0		0		1	
計 (b)	16	7	0	0	4	2	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	24	9
	23		0		6		0		4		0		0		0		33	
私費 (c)	44	43	8	20	340	270	25	21	473	375	130	116	4	6	7	0	1031	851
	87		28		610		46		848		246		10		7		1882	
小計 (d) ((a)+(b)+(c)) (在留資格「留学」の者)	114	89	8	20	494	369	32	26	787	560	196	161	4	6	7	0	1642	1231
	203		28		863		58		1347		357		10		7		2873	
私費 (e) (在留資格「留学」以外の者)	17	6	2	0	3	3	0	0	12	11	8	1	0	0	0	0	42	21
	23		2		6		0		23		9		0		0		63	
外国人留学生合計 (f) ((d)+(e))	131	95	10	20	497	372	32	26	799	571	204	162	4	6	7	0	1684	1252
	226		30		869		58		1370		366		10		7		2936	
永住者等 (g)	101	36	2	1	57	19	4	5	36	32	3	2	0	1	0	0	203	96
	137		3		76		9		68		5		1		0		299	
外国人学生 総計 (f+g)	232	131	12	21	554	391	36	31	835	603	207	164	4	7	7	0	1887	1348
	363		33		945		67		1438		371		11		7		3235	

学部・研究科等別外国人留学生数

平成24年5月1日現在

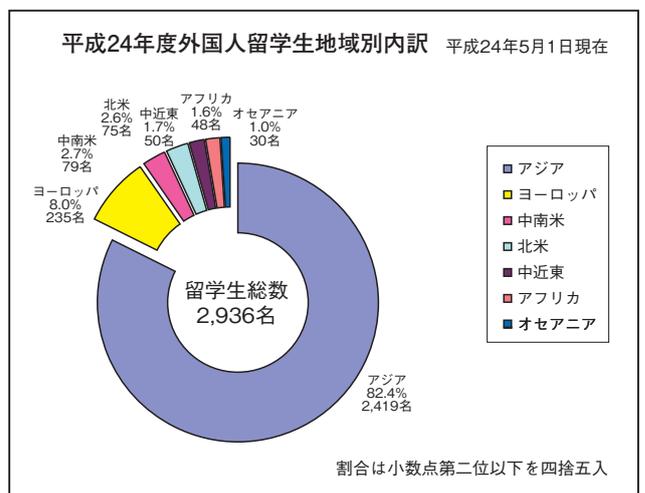
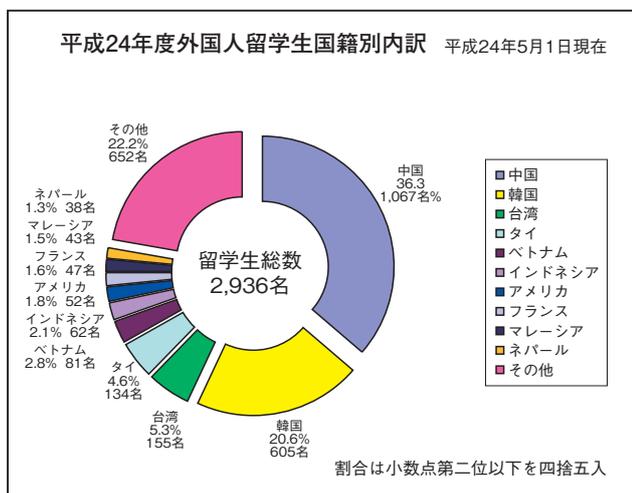
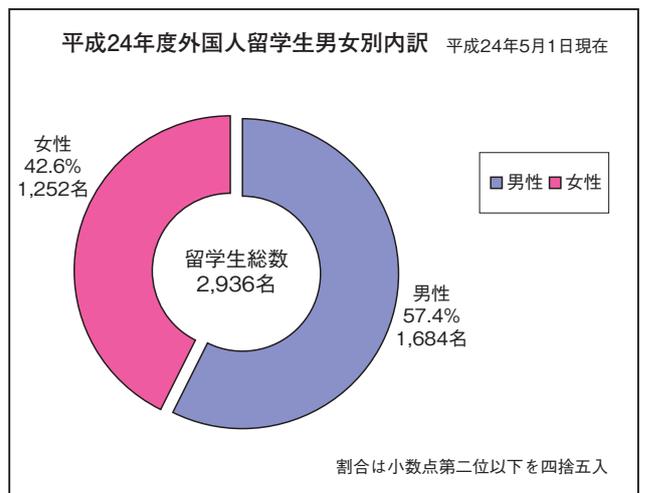
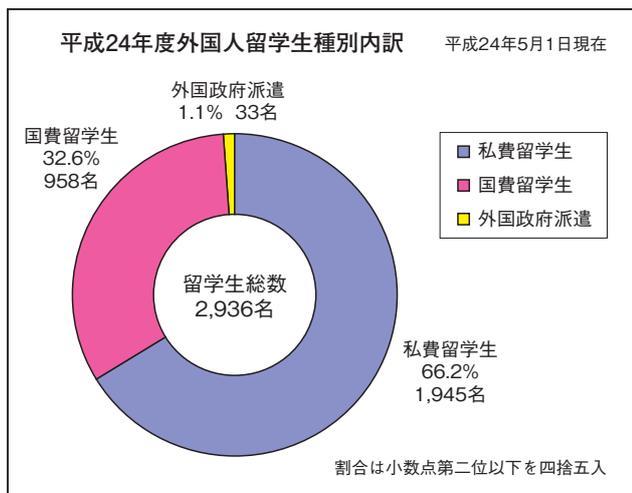
区 分	学部				大学院								研究所等		小 計		合 計		
	学生		研究生等		修士課程		専門職学位課程		博士課程		外国人研究生等		大学院研究生					研究生	
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	
学部																			
教養学部 (前期課程)	36	65															36	65	101
法学部	6	6															6	6	12
医学部		2		1														3	3
工学部	25	31		8													25	39	64
文学部	7	3															7	3	10
理学部	4	6															4	6	10
農学部	1	2		1													1	3	4
経済学部	4	10															4	10	14
教養学部	7	3		20													7	23	30
教育学部	1	1															1	1	2
薬学部	2	4															2	4	6
小 計	93	133		30													93	163	256
大学院																			
人文社会系研究科					12	30			16	45	14	28		2			42	105	147
教育学研究科					2	10			4	37		7					6	54	60
法学政治学研究科					6	20		2	5	29	7	11					18	62	80
経済学研究科					8	36			2	10	2	2					12	48	60
総合文化研究科					14	47			37	95	15	28		3			66	173	239
理学系研究科					4	19			20	22	5	9					29	50	79
工学系研究科					112	242			211	309	34	78		1			357	630	987
農学生命科学研究科					11	46			71	98	3	24		2			85	170	255
医学系研究科					4	22	3		21	60	5	6		1			33	89	122
薬学系研究科					2	10			7	10	7	6					16	26	42
数理学系研究科					4	4			5	4							9	8	17
新領域創成科学研究科					36	59			39	77	7	19					82	155	237
情報理工学系研究科					20	44			41	45	8	13		1			69	103	172
学際情報学府					12	33			16	34	4	22					32	89	121
公共政策学教育部							9	44				2					9	46	55
小 計					247	622	12	46	495	875	111	255		10			865	1808	2673
研究所等																			
地震研究所																	1		1
生産技術研究所																	6		6
小 計																	7		7
合 計	93	133		30	247	622	12	46	495	875	111	255		10		7	958	1978	2936

国又は地域別外国人留学生数

平成24年5月1日現在

区 分	国費						私費						合 計						総計			
	学部		大学院等				学部		大学院等				学部		大学院等							
	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程		博士課程	研究生等	
アジア																						
パキスタン			1		9		10			5		2	1	8			6		11	1	18	
インド			5		13	2	20			2		6	1	9			7		19	3	29	
ネパール	1		2		7	1	11			12	5	9	1	27	1		14	5	16	2	38	
バングラデシュ	3		1		12	2	18			9	1	8	2	20	3		10	1	20	4	38	
スリランカ			5		8		13			6	1	3		10			11	1	11		23	
ミャンマー			2		7	1	10			5	1	4		10			7	1	11	1	20	
タイ	8		30		28	5	71	10		15	4	29	5	63	18		45	4	57	10	134	
マレーシア	6		9		5	3	23	2	2	5	1	7	3	20	8	2	14	1	12	6	43	
シンガポール	6		3	2	3		14	3	1	7			11	20	9	1	10	2	3		25	
インドネシア	5		9		12	3	29			2	12	4	13	2	33	5	2	21	4	25	5	62
フィリピン			6	1	10	4	21			1	7	4	1	2	15			13	5	11	6	36
韓国	30		33	3	101	23	190	36	1	113	3	226	36	415	66	1	146	6	327	59	605	
モンゴル	7		2	1	3		13	1		7	1	4	1	14	8		9	2	7	1	27	
ベトナム	12		15		10	2	39	1	2	13	2	19	5	42	13	2	28	2	29	7	81	
中国	2		30		154	12	198	74	10	315	12	346	112	869	76	10	345	12	500	124	1067	
カンボジア			3		1		4			2		2		4			5		3		8	
ブータン										1			1				1				1	
ラオス					1		1			1		2		3			1		3		4	
ブルネイ												1		1					1		1	
マカオ	1						1			2			2		1		2				3	
台湾								1		41	2	86	25	155	1		41	2	86	25	155	
バレーン												1		1					1		1	
小 計	81		156	7	384	58	686	128	19	580	41	769	196	1733	209	19	736	48	1153	254	2419	
中近東																						
イラン	1		1		8	2	12					8		8	1		1		16	2	20	
トルコ			2		5		7			1		2	1	4			3		7	1	11	
シリア					1		1												1		1	
レバノン			2		1	1	4										2		1	1	4	
イスラエル				1	1	2	4											1	1	2	4	
ヨルダン			2		1		3										2		1		3	
サウジアラビア													1	1						1	1	
アフガニスタン			1		1	1	3										1		1	1	3	
イエメン												1		1					1		1	
アラブ首長国連邦						1	1	1						1	1					1	2	
小 計	1		8	1	18	7	35	1		1		11	2	15	2		9	1	29	9	50	
アフリカ																						
エジプト					4	1	5					4	1	5					8	2	10	
スーダン					1	1	2					2		2					3	1	4	
チュニジア					3		3					1		1					4		4	
アルジェリア						1	1			1			1				1			1	2	
マダガスカル			1				1										1				1	
ケニア					1	1	2			1		1		2			1		2	1	4	
タンザニア					1		1			2		1	1	4			2		2	1	5	
コンゴ民主共和国												1		1					1		1	
ナイジェリア												2		2					2		2	
ガーナ			1				1			1	1		2				2	1			3	
モロッコ					1	1	2			3			3				3		1	1	5	
エチオピア					2		2			1			1				1		2		3	
ウガンダ			1				1										1				1	
ジンバブエ						1	1													1	1	
ベナン					1		1												1		1	
マラウイ										1			1				1				1	
小 計			3		14	6	23			10	1	12	2	25			13	1	26	8	48	
オセアニア																						
オーストラリア			4		5	1	10	1	1	2		4	2	10	1	1	6		9	3	20	
ニュージーランド			2		2	1	5			1	1		3				3		3	1	8	
バブアニューギニア						1	1													1	1	
フィジー						1	1													1	1	
小 計			6		7	4	17	1	2	3		5	2	13	1	2	9		12	6	30	
北米																						
カナダ			1		4	2	7	1	1	4	1	6	3	16	1	1	5	1	10	5	23	
アメリカ			4	2	6	1	13			1	12	2	19	5	39			1	16	4	25	6
小 計			5	2	10	3	20	1	2	16	3	25	8	55	1	2	21	5	35	11	75	
中南米																						
メキシコ			1		3	1	5					3		3			1		6	1	8	
グアテマラ					1		1												1		1	
エルサルバドル	1						1								1						1	
コスタリカ										1			1				1				1	
キューバ			1		1		2										1		1		2	
ドミニカ共和国					1	1	2												1	1	2	
ブラジル	2		13	1	10	3	29			1		4	5		2		14	1	14	3	34	
パラグアイ			1				1					1	1				1		1		2	
アルゼンチン	1				1	1	3								1				1	1	3	
チリ			1				1										1				1	
ボリビア												1	1							1	1	
ペルー			3			1	4					4	4				3		4	1	8	
エクアドル			1				1										1				1	
コロンビア			2		4		6			1		1	2				3		5		8	
ベネズエラ					3		3												3		3	
パナマ			1		2		3										1		2		3	
小 計	4		24	1	26	7	62			3		13	1	17	4		27	1	39	8	79	

ヨーロッパ																				
アイスランド				1																1
フィンランド	1			1																2
スウェーデン	2			2																6
ノルウェー																				1
デンマーク																				1
アイルランド																				1
イギリス																				4
ベルギー																				1
オランダ																				2
ドイツ																				3
フランス																				6
スペイン																				23
ポルトガル																				9
イタリア																				7
ギリシャ																				3
オーストリア																				4
スイス																				2
ポーランド																				6
チェコ																				2
ハンガリー																				1
ルーマニア																				3
ブルガリア																				3
ロシア																				7
エストニア																				1
ラトビア																				1
スロバキア																				1
ウクライナ																				3
ウズベキスタン																				1
カザフスタン																				1
クロアチア																				1
マケドニア																				2
セルビア																				1
キルギス																				1
グルジア																				2
トルクメニスタン																				1
小計	7																			45
合計	93																			247



プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #05

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていき覚悟をしています。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

5月下旬、「東大 セシウム除染布を開発」といった記事が新聞各紙を飾りました。これは、生産技術研究所の化学系有志によるプロジェクトの成果です。研究チームが開発した放射性セシウムを効率よく吸収する布は、安価で扱いやすいため、ボランティアの除染活動でも利用できるといいます。設立以来「技術の実際問題を取り上げ、各専門知識を総合的に研究して実用化する」ことを目的に活動している生研が、復興支援でもその成果を出しはじめました。開発に関わった4名の先生（迫田章義教授、石井和之准教授、工藤一秋教授、立間徹教授）にお話を伺いました。

プロジェクト名： 環境汚染性イオンの除去等に関する研究

広報課 プロジェクト立ち上げの経緯を教えてください。

迫田 個人的に震災後5月頃に石巻を訪ね、その被害の甚大さに愕然としました。と同時に研究者として何かできないかという思いを強くしました。その後、今度は飯館村の村長と会う機会を得て、線量計を持って村へ入りました。田植えの風景を過ぎ、峠を越えたところで、線量計の測定値が急上昇し、景色が一変。草がボーボーと生える中を自衛隊の車や警察車が走るのみで、村には人一人、犬猫一匹いない…。ただ事ではないことを肌で感じました。飯館村の村長からは、「藁をもつかむ気持ち」と協力を請われ、微力ではあるけれども、「藁になるう」という気持ちになりました。

立間 一方で、4月早々には生研の化学系有志で何かできないかという議論が始まっており、津波の汚泥、塩害…いくつか案が出ましたが、私たちの知識・技術を活かしやすいということから、農地などを対象にした除染に焦点を絞りました。偶然、東北出身の先生が多いことも、大きな原動力になりました。

広報課 除染布の開発の経緯と布の説明をお願いします。

工藤 まず最初にセシウムを吸着するための化学的な仕掛けを検討しました。私は有機化学者の立場から、セシウムの選択的な吸着剤としてクラウンエーテルについて取り組みました。クラウンエーテルを表面につけた磁性粒子を土壌にまいてセシウムを吸着させ、それを磁石で回収するという方法を想定したものです。しかし、吸着能は今一つという結果でした。磁性粒子をまいて回収というプロセスも最適とは言い難かった。

石井 広い範囲が低濃度で汚染されているという状況でしたので、結果として布が適しているということになりました。セシウムイオンに対する吸着剤として、人工青色顔料である「プルシアンブルー」を利用しました。プルシアンブルーは細かな粉末状で、これまで繊維に固定化しても脱落しやすい傾向がありました。しかし、プルシアンブルーとなじ

みやすいセルロース系の繊維を用いて、2種類の原料溶液へ繊維を順次浸すことで、とても簡便に、しかし強固に固定化することに成功しました。昨年6月のことです。

工藤 プルシアンブルーは、水に溶けたセシウムをよく吸着することは知られていましたが、様々なイオンが存在する実際の土壌環境で、セシウムを選択的に吸着するかは疑問でした。そこで、飯館村で雨どい水を除染する実証実験をしたところ、一晩浸して飲料水の基準値より低くなるという結果を得、プルシアンブルーが選択的にセシウムを吸着することもわかりました。

広報課 実用化に向けての課題は？

石井 この布は、本当に安価にできます。持ち運びも楽で、用途に合わせて大きさも自在です。専門家ではない住民やボランティアが中心の除染活動でも、広く利用できます。ただ、不特定の人にこのまま配ると、使い終わったらポイッと捨てられてしまうかも知れません。自治体や国などが、使用後の布を責任もって回収するまでのしくみを確立しなければいけません。最終処分方法が決まったところで、広く普及させたいと思います。今後は、福島大学と石巻専修大学と共同で、環境省の支援と飯館村の協力を

受けて、布の吸着効率をさらに高めて、低コストで専門家の立ち合い不要な小規模分散型土壌除染システムを構築する計画です。今回の成果を広く知ってもらい、自治体等での採用について検討を呼び掛けたいですね。

また、この布は吸着したセシウムを化学処理で取り除けば繰り返し使うことも可能です。再利用のしくみもこれからの課題です。

広報課 今回の成果は生研ならではの印象を受けますね。

立間 この成果は、錯体化学が専門の石井先生が中心となり、有機化学が専門の工藤先生が布と吸着剤の接合、電気化学が専門の私が吸着剤の最適化、水・土壌が専門の迫田先生が土からイオンを剥がすプロセス、という役割分担によって生み出されたものです。これまでも生研では分野を越えた連携で様々な課題に取り組んできましたので、今回もスムーズにできました。

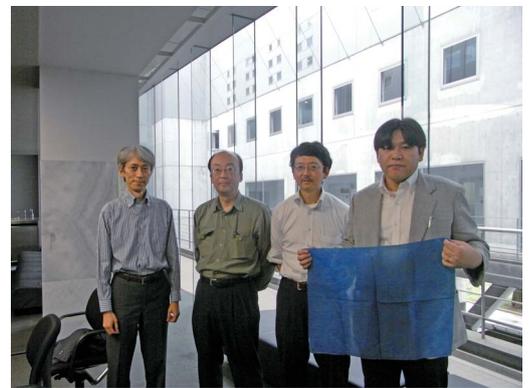
迫田 1本の藁ではひ弱でも、何本かまとまれば綱となりなし得ることもできます。実用化に向けて、チーム一丸でもうひと頑張りしたいと思います。

関連URL（プレスリリース）

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/public01_240528_j.html



(左) 福島県飯館村での実証実験の様子。雨どい水に一晩浸したところ、飲料水の基準値よりも低くでき、十分な能力があることが証明された(右) プルシアンブルーを固定化した布と研究チーム。左から、立間教授、迫田教授、工藤教授、石井准教授



一プロジェクトに関する問い合わせ—
生産技術研究所 准教授 石井和之
k-ishii@iis.u-tokyo.ac.jp
構成：本部広報課（内線：82032）

ひょうたん島通信

大槌発！

第7回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から毎月、沿岸センターと大槌町の復興の様子をお届けします。

まちかた 大槌町町方の空気

道田 豊（大気海洋研究所附属国際連携研究センター 教授、国際沿岸海洋研究センター 兼務）

あの忌まわしい震災の2日後、2011年3月13日の朝刊に掲載された1枚の写真を見て声を失いました。この日、柏キャンパスの大気海洋研究所に設置された災害対策本部に詰めていた私は、他のメンバーとともに、思うようにならない情報収集作業にじりじりとした気持ちで当たっていました。

朝日新聞に載ったその写真は、3月12日に大槌町中心部を空撮したもので、町は津波の後に発生した山火事のものと思われる煙に覆われていました。煙越しに見る市街地は、鉄筋の建物がぼつぼつと残っているだけで、すぐには位置関係を同定できません。

方角もよくわからない写真を丹念に見ているうちに、一つの特徴ある建物に気づきました。大槌町立図書館です。道路に面した2辺が鋭角をなす変わった形をした図書館は、2010年3月まで筆者が住んでいたアパートから歩いて3分ほどの距離です。となると……ありました。住んでいたアパートを含め大小3棟の3階建て建造物があった一角が判別でき、3棟とも外形はとどめていることがわかりました。しかし、私のアパートは鉄骨と屋根だけを残して、1、2階だけでなく私の部屋があった3階部分の壁も失われているようでした。もしあそこに私が居たら、と、津波で一瞬にして日常が奪われてしまったことが実感され、写真を持つ手が震えました。

住宅地というのは、都会では昼間はひっそりしてたりしますが、私がお世話になっていた大槌の町方はそれなりに人の往来もあり、路地でお年寄りが話しかけたり、行きかう人が挨拶する声が聞こえたり、あるいは何やら作業場の音が聞こえるなど、思いのほか「動き」がありました。そして、かすかに魚の香りが含まれる海からの風、路地の少し淀んだような、でも決して不快ではない空気。学生時代から何度も訪れ、縁あってこの地に暮らすことになった私は、そうした日常を2007年の秋から2年半にわたって楽しんでいました。

かつて住んでいた場所は「須賀（すか）町」といいます。須賀というのは砂州、砂浜といった意味らしく、低い土地です。私の居たアパートは、JR大槌駅から徒歩5分、かつて水産物の保管に使われていた大きな冷凍庫や冷蔵

庫を取り壊して2007年に新築されたものでした。敷地内には倉庫のような建物が残っていて、大家さんの関係の方が業務用車両の駐車場および作業場として使っておられました。入居直後にこの方にお会いした際、「ここは津波の来る土地だから。注意報や警報が出たら、何も持たないで暖かい格好だけしてすぐに逃げなきゃだめだ。ここからだ『江岸寺』だ。行き方わかるけ？」と、500メートルほど先の高台にあるお寺までの避難経路を教えてくださいました。今回の津波はその江岸寺まで押し寄せるほどの尋常でない大きさでした。

津波から約10日過ぎた3月22日を皮切りに、その後の復旧関連活動や沿岸域の海流調査などのため私は何度も現地に入り、そのたびに、時間のある時はアパートのあった場所に行ってみます。まだ海水が引いていなかった2011年3月は街は混乱状態でした。その後徐々にがれきの撤去などが進み、2011年末まで残っていたアパートの鉄骨も年明けに行ってみると撤去されていました。片付けが進むと、まさに何も無い状態になり、むしろ寂寥感が増した気がします。空気も人を包み込むものではなく、ほこり混じりで吹きぬけて行きます。

国際沿岸海洋研究センターは大槌町、とく

に立地する赤浜地区の方々に支えられて約40年を過ごしてきました。現在、赤浜での再建を目指して様々な作業が進められているところです。筆者は、東京大学広報誌『淡青』に沿岸センターの紹介記事を書いたことがあります（『淡青』第21号、2008）。そこにも書いたように、震災前は、毎年夏の一般公開、地区のお祭りなどを通じて大槌町の皆様と触れ合う機会がありました。今回の津波で、沿岸センター教職員や学生の避難にあたり赤浜地区を含む町の方々に並みならぬご支援をいただきましたし、東京大学と大槌町は復興に向けて連携協力協定を締結したところです。津波を機に関係が強化されており、これまで以上に地区と一体となって町づくりに貢献していく必要があると痛感しています。沿岸センターの復興にあたって、赤浜地区の一員として地区の復興と歩調を合わせていく必要があります。

住宅があり、人々が居て、その日常あってこそその大槌の「空気」です。街の中心の場所は変わっても、町方のあの「空気」は必ず戻って来る、そう信じ、その日が遠くないことを願って、沿岸センターの復旧を目指したいと思います。

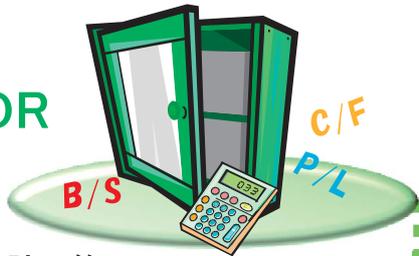


【左】震災前（2007年10月）の大槌町町方（須賀町付近）の様子。中央の白い3階建てが、筆者が住んでいたアパートです。小さくて分かりにくいですが、アパート前の道路にはベビーカーを押すお母さんとその知人と思われる人が談笑しながら歩いています。【右】2011年3月23日、津波の12日後に撮影した大槌町須賀町の一角。海側から町を北向きに見ています。手前の鉄骨だけになった建物が、かつて住んでいたアパート。単身赴任で、3階手前側の部屋に住んでいました。アパートの脇にはまだ海水が残っています。

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学

第22回 ご使用は計画的に！



「乾杯！」大ジョッキを一気に飲み干したA君。蒸し暑い夏の夜にキーンと冷えた生ビールは格別です。仲良し6人組の暑気払いは他愛ない会話で盛り上がり、アツという間に宴もタケナワ、お開きに。「一人5千円ね」会計担当のB君の言葉に、財布を覗き（ゲッ！3千円しかない）と青醒めたA君。「ごめん！今日の分貸して」「え～、またかよ。仕方ねーな」「悪い。今日昼に自動車税払ったらなくなっちゃった。給料日に返すから」「金ねーのに、車なんか買うからだ。ぱーかなんとかその場を逃げ切り（ふうやれやれ、3千円は手元に残った。給料日までにもう一回くらい飲みに行けるかなあ）なんて罰当たりなことを考えているA君は無視して、彼のお財布状況を貸借対照表(BS)にしてみました。

借方		貸方	
資産		負債	5千
車両	1,000千	純資産	998千
現金	3千		

現在彼の総資産額は自慢の新車と現金で1,003千円也。B君からの借金5千円があると純資産額はたっぷり998千円。貸借的には大変結構な財政状況です。ところが、これを現金ベースでみると、固定資産の車はすぐ現金化できず、持ち金は3千円ぽっきり。友達思いのB君のおかげで赤字になっていないだけ。健全なお財布状況とは言えません。そんなA君のお財布を一企業のお財布に、車を受取手形や売掛金に置き換えてみます。ここでもし手形も売掛金も回収できない事態が発生したら。それは利益が出ているのに会社から現金が不足し、いずれ資金繰りが悪化し倒産、いわゆる「黒字倒産」へとつながりかねません。

とならないために、財務諸表には貸借対照表(BS)や損益計算書(PL)では読み取れない「お金の流れ」を表す「キャッシュ・フロー計算書(CF)」と呼ばれる第3の財務諸表があるのです。一定の期間「出ていくお金」と「入ってくるお金」を用途別に分類し、増減要因と資金残高を示す報告書は、企業の安全性と質を見極める判断材料にもなります。

国立大学法人の場合の「入ってくるお金」は大学の教育研究活動を支え、質を向上させていくための資金です。CFはその資金の安定性を示す報告書。そのため、通常業務に必要な資金の受払状況を表す「業務活動によるCF」、将来の運営基盤の確立に必要な投資や資金の受払状況（固定資産の取得、有価証券の売買や施設費収入等）を表す「投資活動によるCF」、借入や返済などの資金状況を表す「財務活動によるCF」の3つの区分から成り立ちます。下表は東京大学の23年度のCF。これだけでは、業務活動は安定し、投資活動も活発、大変結構な資金状況と思えますが、実は23年度の固定資産の減価償却費は359億円。会計的に見れば資産の経年劣化に対し、295億円の投資では64億円程不足です。財務諸表は1つの表だけでは正しい財政状況を知ることができないのです。

さて、前述のA君。当座の資金確保は完璧でも、調子に乗っているとお金も友情もみんななくなって、最後に残ったのが借金とメタボ腹…なーんてことにならないよう通常業務活動（給料）以上の投資活動は慎重に、ね。（青）

(単位：億円)

業務CF	437
投資CF	△295
財務CF	△77
期末資金残	321

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取ることがあります。あらかじめご了承ください。—ご意見、ご質問お待ちしております！



科学技術インタープリター養成プログラム

「サイエンサー」は科学番組か？—Yes, it is!

定松 淳

教養学部附属教養教育高度化機構 特任講師

子供が生まれて少し大きくなってくると、それまでと違ってNHKのEテレを見る機会が増えてくる。昔の教育テレビだ。20年以上ぶりに見て気づくのは、教育テレビもずいぶん様相を変えているということだ。朝のお出かけ前にシュールな言葉遊びが楽しめる『シャキーン!』、「夜更かしワークショップ」が楽しい『2355』、大掛かりな実演を見せてくれる『大科学実験』、スタイリッシュな映像で魅せる『デザインあ』……そんな中でも異彩を放っているのが『サイエンサー』である。

「納豆の糸をうまく断ち切るにはどうすればいい?」とか、「嬉しいときガッツポーズをしてしまうのは、なぜ?」とか、または「ファーストキスは本当にレモン味なの?」などといった視聴者の素朴な疑問に、3人の女の子たちが少しだけヒントももらいながら、あれこれ考えてゆく番組だ。かなりチープな感じのつくりの番組なのだけれども、これがなかなか見せる(我が家の小2坊主もすっかり気に入っている)。インタープリター養成プログラムの授業の一環で、この番組のプロデューサーの方のお話を聞く機会があり、その理由が非常に納得できた。

この番組、脚本が全くないのだそう。どんな問題を与えるかも出演者に教えず、一日がかりでロケを行う。出演者が問題に取り組む途中では、すぐに解答に到達するわけではない微妙なヒントが与えられる。このヒントをつくるためにスタッフが数週間、プレーンティングをして準備をする。よってこの番組は、普通の番組と比べて相当な部分が、出演者にとって仕組まれていないプロセスになっている。だから出演者は一生懸命考えるし、答えにたどり着いたときは本当に喜ぶ。それが、他の番組ではちよっと目にかかれぬ、生き生きした魅力をこの番組に与えている。

そんな試行錯誤のプロセスを、プロデューサーの方は「グルグル思考」と呼んでいた。そう、この番組はこの「グルグル思考」をできるだけ追体験してもらおうという点において、科学番組を志向しているのである。というのも、この「グルグル思考」は、研究者の方々は皆うなずくところがあるはずのものではないだろうか。ああでもない、こうでもないと考え、未知の領域を切り拓く。それは、それまで見えていなかったものが見えるようになるプロセスであり、大げさにいえば自分が自分を越えてゆくプロセスである。そんな苦楽一如の過程こそ、われわれを研究にひきつけて止まない核心だからだ。

そしてこれに対し思わずいられないのは、サイエンスコミュニケーションに限らず、日本の教育は「新しい知識を増やす」、あるいは「所与の解き方をマスターする」という点に重きが置かれているということだ。しかし、勉強や学問の中心には、知識獲得や問題処理の速さ・正確さよりも、「グルグル思考」の苦しさで楽しさこそがあってほしい。そんな意味で、『サイエンサー』の試みに大きな敬意を私は抱く。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>



世界的な技術大国、日本。しかし、起業の活動率は先進国中、最下位クラスに位置し、アントレプレナーシップ(起業家精神)の喚起、そして、起業を後押しする社会文化の醸成が強く求められています。社会にイノベーションをもたらす起業活動は、課題の解決や経済成長の原動力ともなるためです。小宮山宏前総長の思いを引き継ぎ、東京大学産学連携本部が主催者と強く連携する形で推進された、「アジア・アントレプレナーシップ・アワード2012」は、日本発の国際ビジネスコンテストです。5月9日～11日の3日間にわたり、千葉・柏の葉キャンパス地域において、アジア各地から集まった起業家やベンチャーキャピタリストなどを中心に約550人が参加し、盛大に開催されました。(※巻頭の特集ページと合わせてお読みください)

ASIAN ENTREPRENEURSHIP AWARD 2012

アジア・アントレプレナーシップ・アワード2012

Why Asia?

中国やシンガポールをはじめ、アジア各地には、イノベーション創出の最前線で活躍するアントレプレナーが多く存在しています



01



Why Kashiwanoha Campus?

今回、アワードが開催された千葉・柏市の柏の葉キャンパス地区は、スマートシティを実現するモデル都市。本学の柏キャンパスをはじめ、大学や研究機関、インキュベーション施設が数多く立地し、イノベーション創出における一大拠点の形成が実現可能な地区なのです。

- 日本の起業家が海外の起業家から刺激を受け、世界に視野を広げる場の提供
- 日本がリーダーシップをとり、イノベーション創出の最前線で活躍するアジア各地の大学関係者・インキュベーターがノミネーション委員会を組成(委員長:各務茂夫 産学連携本部事業化推進部長/教授)
- 最先端の知や技術でイノベーションに挑む大学発ベンチャー企業が参集

開催のPoint!



- ベンチャー指南役となる日本人メンターがアジアの起業家を日本で育成し、手厚いベンチャー支援環境をアジアにアピール
- 有望なベンチャー企業を呼ぶこむことで、世界からベンチャーキャピタルやインキュベーター、メンターが集結
- シリコンバレーのようなイノベーション創出の「エコシステム(生態系)」構築で、世界に誇る一大拠点形成へ

アワード開催の背景

日本が主導して、海外に門戸を開いた国際ビジネスコンテストを開く機会は、残念ながら今までありませんでした。今回、各ノミネーション委員には、大学の研究成果をいかにイノベーションに結び付けるかという観点から、大学発ベンチャーを推進する大学関係者を中心に、各地域において、旬でイキのいいテクノロジーベンチャー企業を推薦していただきました。スタンフォード大学のふたりの学生が

創ったGoogleの時価総額は、今やトヨタ自動車の1.5倍。若き起業家のダイナミズムが世界を引っ張り、イノベーションを創造しているのは紛れもない事実です。アジアのマーケットは、大きく広がりをしています。今回、世界へ向けたイノベーションの一大拠点宣言をする中で、アジアのベンチャー企業を通して、大学の研究成果をイノベーションに結び付け

ることができるのか、また、それらを日本へどう取り込むことができるかが問われました。そして実際に、今回の開催により、大学がイノベーションの源泉として、いかに社会・経済に寄与できるかが強烈に示されたと同時に、国内外の企業が相互に刺激しあうことの重要性が改めて認識されました。

大学とベンチャー支援活動

経営学者 ヨーゼフ・シュンペーターは『経済発展理論』の中で、「起業家精神そのものが発展のベースになる」と唱えています。これに加えて大学、あるいは学生が持つ力が、イノベーションにとって非常に重要であるといえます。その際にカギになるのがエコシステム(持続可能な生態系)でしょう。大学がベンチャーを育成する重要性として、イノベーション、新産業の創出という重要な役割があることは上記の通りですが、以下のような点も重要です。大学の研究成果を特許として出願した場合、それを事業のため使用することを希望する企業からのライセンス収入が得られますが、相手企業がライセンス料を払うのが困難なベンチャー企業の場合、現金でなく

株を受け取ることがあります。例えば、スタンフォード大学はこのような株をGoogleから受け取り、Googleが上場して株の価値が上昇した後に株を売却することで、約400億円を得たとされています。さらに、寄付の文化が確立されている米国では、成功を収めたベンチャー創業者から毎年、母校の大学へ寄付が行われ、その蓄積した資金を運用して、研究資金や教育資金に充てられるというわけです。大学発ベンチャーの理想の姿ともいえます。忘れてはいけないのがベンチャーキャピタル(VC)の存在です。米国のVCの資金の多くが、長期の運用が求められる年金と大学基金で賄われていることからわかるように、米国には、資金をリスクマネーに

投入する、本質的なエコシステムともいえる社会の仕組みがあります。このような仕組みの構築をめぐる、世界における大学間競争がすでに始まっているのです。第1回目の本年度は、アジア12の国と地域からノミネートされた18社が、事業の革新性、経済的・社会的影響力や実行力を競い合い、大成功のうちに終わることができました。2004年の国立大学法人化後、本学においても、産学連携本部が運営するアントレプレナープラザから上場会社が出るなど、ベンチャー支援活動の大きな可能性が見え始めています。10年スパンで本アワードを開催することで、日本の大学におけるベンチャー支援の仕組み作りがより強固なものになればと願っています。

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携課)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索



このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

在宅医療研究会 多職種連携の 課題を解決

最近の急速な医学の進歩により、従来不治とされた疾病が治癒可能になり、複数の疾患を抱える高齢者が増えている。そのため、医療費も増加し続け、その抑制策として、在宅医療や在宅介護に対する需要が高まっている。政策ビジョン研究センターでは、本年



秋山昌範教授

4月より、高齢社会の医療改革に向けた政策提言を行うことを目的として、在宅医療に関する課題研究会を発足した。本研究会において、事例紹介と討論を行うことにより、今後の在宅医療に求められる仕組みや制度について検討し、制度上の課題を明らかにする。

本研究会の特徴は、産学の協働により幅広い立場の専門家が参画していることである。在宅医療に関わる医師・訪問看護師・訪問薬剤師をはじめ、医療関係者のみならず、ヘルパーやケアマネージャーなどの介護従事者、患者家族、ヘルスケア産業、医療システムの専門家、情報法や行政の専門家、ジャーナリストなどがコアメンバーとして参加している。複数の立場から多角的な議論を行うことで、

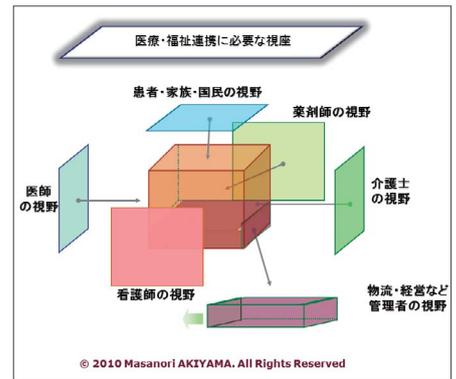
包括的かつ学際的な検討を試みる。

本研究会では、ボトムアップ型アプローチで現場からの意見を集約し、課題抽出を行い、政策担当者へつなぐことを目的としている。そのため、演者の講演を出席者が聴くだけでなく、全員が各々の立場から発言し、インタラクティブな意見交換を行っている。

「在宅医療の現状、地域医療介護連携に求められるシステムとは」をテーマとして、第1回研究会が4月16日に開催された。代表者の秋山昌範（政策ビジョン研究センター教授）より、在宅医療に関する問題提起を行った。昨年度愛媛県新居浜市において行われた地域医療連携システムの実証研究結果について、新居浜医療生活協同組合の鴻上千恵美専務理事が、現場の立場から報告した。70歳代のヘルパーにおけるデジタルデバイドの問題等、最先端の技術を現場に導入していくときどのような配慮が必要か、討論が行われた。

5月28日の第2回研究会では、在宅医療における薬剤師の役割、訪問服薬指導をテーマに薬剤師の黒岩泰代先生と千島己幸先生が講演を行った。在宅医療においては病院と同じ服薬管理が難しく、薬剤師による訪問服薬指導が必要であるが、薬剤師1人当たり1日に6～8件の訪問が限界であるのに、現行の保険制度では引き合わないとの問題が指摘された。

さらに問題なのは、患者のプライバシー保護を目的として、薬剤師が病名を知ら



人は立場によって見方が異なるものだ。

されていないことだ。在宅医療において薬剤師が病名を知らずに判断を行うことは、医療過誤の原因となり得るので、適正な役割分担を検討する必要があるという指摘もなされた。多職種連携に個人情報保護法が障壁となっているのである。プライバシー情報を十分に保護しながら、複数の関係者が連携するためには、包括的な連携の仕組みが必要である。そのためには、個別のケースや事例に基づいてモデリングを行い、一般化に向けてどのような取り組みが必要か、検討する必要がある。

第1回研究会が4月に開催されて以降、毎回活発な議論が行われており、その成果を1年間で政策提言としてとりまとめる。7月からは、ユースケース毎にプライバシーに配慮した細かいルールを作成するワーキンググループを組織しており、今後の研究会で、引き続き討論を行う予定である。

医療安全をめぐる対話

畑中 綾子 特任研究員

医学部附属病院・21世紀医療センターとイギリス・キングスカレッジ医療安全および医療サービスの質に関する研究センター (Patient Safety and Service Quality Centre) の共催による医療安全推進のための日英共同ワークショップが6月5日、本学附属病院内で開催された。イギリスからは3名の研究者、日本からは医療安全や医療制度に関わる5名の研究者、うち政策ビジョン研究センターから筆者が参加し、相互に話題提供を行った。

医療安全という政策課題にあたっては、イギリスと日本に時代的な共通点がある。イギリスでは、1990年代後半、プリストル小児王

立病院で手術後に患者が非常に高い確率で、連続して死亡していたことが発覚した。この事件をきっかけに、イギリスでは死因究明制度の見直しや医療安全教育への徹底などに着手することとなった。一方の日本では、1999年に都立広尾病院、横浜市立大学病院で連続しておきた取り違え事故の発覚をきっかけに医療事故情報の収集事業や医療安全調査への制度的な取組がなされるようになった。この10余年の間に無我夢中で医療安全に取り組んできた両国にとって、これまでの経過を少し冷静に振り返ることができる時期となった。

「イギリスはプリストル事件を、日本では広尾・横浜市立事件を経験し、医師は、患者は、法律家は賢くなったか」。この問いに、日本の研究者は少し悩みながらも YES と答えた。事

件後、医療安全をめぐる関係者間の対話は促進されてきており、対立的だった医療と司法の相互理解も進みつつある。これに対し、イギリスの研究者は「Are you an optimist? (あなたは楽観家か?)」と対応した。この違いはマラソンでいえば、10km 地点で「少なくとも10kmは進んだ」と考えるか、「まだ32.195kmも残っている」と考えるかという違いなのかもしれないし、あるいは日本の研究者は制度創設に携わっている立場から制度的枠組が出来上がってきたことを評価し、イギリスの研究者は現場の医師に近い立場から草の根的な感覚ではまだ不十分という答えだったのかもしれない。安全と質にはどこまで担保すれば十分という具体的な基準はない。両国の切磋琢磨は続く。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

「日本・アジア学」講義紹介

『アジアの環境研究の最前線』
(地域文化研究特別講義Ⅱ)

日本・アジアに関する教育研究ネットワークは、2011年度から「アジアの環境研究の最前線」という科目を実施しています。

この科目は、アジアで発生している環境問題とそれに関わる最新の研究成果を東京大学に所属する気鋭の若手研究者の協力を得ながらオムニバス形式で学ぶものです。

2012年度に取り上げたテーマは、河川環境や国際衛生行政、健康リスク、水環境、マラリア、労働環境、ジェンダー、沿岸環境、情報システムなどいずれも環境研究でホットな話題ばかりです。また、日本をはじめ、中国やタイ、ベトナム、バングラディッシュ、スリランカ、インドネシアなどアジアの多くの国々や特徴的な地域の事例を取り上げました。

この科目は研究科等横断型であるため、農学や医学、工学、新領域、法学などさまざまな専門をもつ学生が受講します。授業の終盤には若手研究者と交流する時間も設けており、受講生たちは自らの専門に引きつけた質問をし、議論はいつも盛り上がりします。

ASNET機構は、今後も『アジアの環境研究の最前線』科目を続けることで、東京大学の大学院生たちにアジアのことを広く、そして深く理解してもらいたいと考えています。



「日本の労働世界とジェンダー」の講義風景

文・写真: 卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

ワタシのオシゴト 第77回

Rings around the UT

法学政治学研究科等大学院係 係長

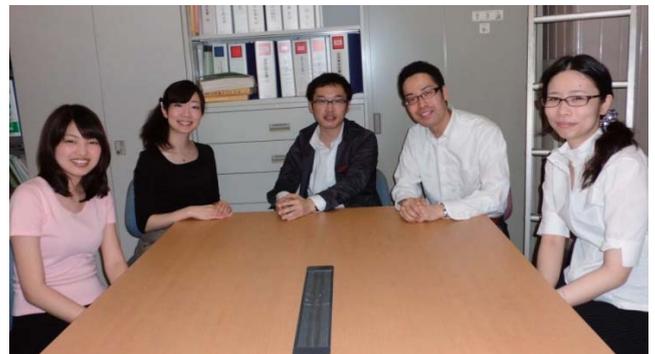
栗原 裕光さん

超フワフワです。



もう7歳、割と熟女

お世話になった教育学部に別れを告げ、4月から法学部の大学院係長に着任しました。大学院係では綜合法政専攻と法曹養成専攻（いわゆるロースクール）の2つの専攻に関する学務的な事項を所管しています。両専攻の制度設計がかなり異なっており、毎日うろたえる日々です。が、困ったことばかりではありません。まず、頼もしい係員に囲まれていること。掲載してる写真からもひしひしと頼もしさが伝わってくるんじゃないでしょうか。それから、顔周りがすっきりしたんじゃないの？と言われること。仕事でオロオロした分、運動しても効果がなかった部分に確実に効いてきているようです。そして最後に、癒してくれる存在、愛犬のムッソリーナ。愛犬という月並みな言葉でしか言い表せない自分が口惜しいことこの上ないですが、駆け寄りただけで疲れも忘れてしまいます。写真では十分に伝わってないかもしれませんが、超フワフワなんすよ、これが。



頼もしい人々

得意ワザ：深いため息
自分の性格：せっかち
次回執筆者のご指名：福井諭さん
次回執筆者との関係：この方も癒し系です
次回執筆者の紹介：リアルジーニアス

■新商品情報!!

2012年8月1日(水)、
「蓮香ハンドクリーム」
新発売!!

みなさんこんにちは!!暑い日々が続いていますがいかがお過ごしでしょうか。

さて、兼ねてからご要望がありました「蓮香ハンドクリーム」が発売します!

2000年以上前のものと推定される古代蓮である大賀蓮の香りを再現した香水、あぶらとり紙に続く姉妹品です。ほんのり爽やかに香る、つけ心地さらさらのハンドクリームです。



「蓮香ハンドクリーム」¥840(税込み)



シャンパンゴールドのリボンのような飾りのある透明な箱つき!!

資生堂との共同開発商品。肌馴染みがよくべたつきが少ないので、湿度が高く暑い夏でも使いいただけます。何度もつけたくなるような心地よさ。夏の肌は汗や湿気で一見潤っているように見えますが、手洗いや空調で意外と乾燥しています。夏場の乾燥もリラックス効果のある爽やかな香りのハンドクリームですっきりお悩み解決!! プレゼント包装の様なかわいいデザインの箱入りです。どうぞ、コミュニケーションセンターでご覧になって下さい!

■8月7日はオープンキャンパスです!!

本郷キャンパスが高校生で賑わう楽しいイベント、オープンキャンパス!!

コミュニケーションセンターももちろん通常営業しておりますので皆さん遊びにいらして下さい。オープンキャンパスの日は例年、キャンパス内もコミュニケーションセンターも高校生で大盛り上がりです。普段とはまた一味違う、コミュニケーションセンターでスタッフ一同お待ちしております!!

■夏季休業のお知らせ

8月10日(金)~8月16日(木)までを夏季休業とさせていただきます。ご了承くださいませ。

8月9日(木)~8月20日(月)指定のご注文は、8月8日(水)までお願い致します。

17日(金)からは通常営業(10:00~18:00)となります。

担当: UTCC山下



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN: 月曜~土曜 10:00~18:00

電話: 03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

■救援・復興支援室の活動(6月~8月)

- ▶6月9日~7月8日...学習支援ボランティアの活動
活動場所:岩手県陸前高田市
活動期間:6月9・10日/6月23・24日/7月7・8日
- ▶6月16日~7月22日...学習支援ボランティアの活動
活動場所:福島県相馬市
活動期間:6月16・17日/6月30日・7月1日/7月7・8日/7月21・22日
- ▶7月23日...第14回救援・復興支援室会議
- ▶8月2日~8月27日...平成24年夏季ボランティア隊の活動
第1班 8月 2日~6日<4泊5日(うち車中1泊)>
第2班 8月 9日~13日<4泊5日(うち車中1泊)>
第3班 8月23日~27日<4泊5日(うち車中1泊)>
- ▶8月17日~24日...福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア
活動場所:大熊中学校(福島県会津若松市内)

■プロジェクト登録研究 85件(2012年3月21日現在)

⇒「再生のアカデミズム(実践編)」連載中。P.28参照

■救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

■救援・復興支援室

Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線:21750

第5話

分室

遠野ものがたり

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

「高校合格出来たよ!」

いつも教室の一番前で熱心に勉強していた当時中3の男子生徒が、笑顔で話しかけてくれました。「本当は勉強が大嫌いで、成績はいつも下から〇番目。高校進学も危ないぞって言われていたけど、ここで東大の皆さんに勉強や学ぶ楽しさを沢山教えて貰えたおかげ。これから高校生活3年間、一生懸命勉強して東大に入るから見ててよね!」

陸前高田市教育委員会と一般社団法人子どものエンパワメントイワテが主催する「学びの部屋」。仮設住宅には、机を置くスペースも勉強する環境も乏しい為、放課後や休日に子供達が安心して過ごせるサンマ(空間・時間・仲間)を小・中学校を開放して提供しています。

本学も、昨年末から学習支援ボランティアとして継続的に参加しており、リピーターを含め多くの東大生が参加しています。「生徒達は、憧れの東大生から勉強だけではなく、震災で一度失いかけた『夢や希望』も頂いている」現地の学習支援員の一言がとても印象的で、今後も息の長い継続的な支援の必要性を強く感じました。

私は生徒達から「勉強を教えない東大の人」と呼ばれているようです..汗

どんどはれ..

文: 赤崎公一



学習支援の様子
(高校合格おめでとう!)



※3/18 濱田総長激励の様子
(高田一中)

執筆者紹介: 救援・復興支援室遠野分室勤務(総合企画部企画課係長) 赤崎公一氏。東日本大震災にて実家(岩手県大槌町)が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。昨年7月より、妻と子(当時1歳)とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母(65歳)と高校卒業以来の同居生活中。連絡先: tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



噴水

重さ50tクスノキの宙乗り

今年の6月と7月は、新橋演舞場で4代目猿之助の襲名披露公演が行われています。猿之助といえばケレンや早変わりが得意でしたが、なんといっても宙乗りが3代目澤瀉屋の十八番でした。それにあやかっか、総合図書館の工事の為、この6月23・24日(土・日)の両日に移植されたクスノキも75tまで支えられるクレーンで植木を乗り越えて医学部本館前に宙乗りでお興入れしました。医学部本館前には、ナミアゲハ・オナガアゲハ・カラスアゲハ・モンキアゲハの食草であるカラスザンショウやチョウセンホソオチョウ・ジャコウアゲハや昨年再発見で話題になったブータンシボリアゲハの食草であるオオウマノスズクサ・ウマノスズクサが生育しています。そこに、アオスジアゲハの食草であるクスノキがやってくることになりました。新参者だからでしょうか、ぼさぼさ頭をさっぱりと散髪してお出ましになりました。ニッケイ属の植物なので、剪定や根っこの掘り出しに際して、ニッキ様の香りが総合図書館周囲に漂っていて、虫よけの樟脳の臭いでなく、シナモンティーでも飲んだいい気分になりました。23日は重さ50tのクスノキが、途中ワイヤーが切れるなどのアクシデントがありながらも北側に移植されました。事前に埋蔵文化財を調査した穴が小さくてなかなか位置が決まらず、日没後も、かなり苦労して造園屋さんたちが仕事をしていました。24日は、重さ38tとやや軽かったのですが、ワイヤーを掛ける位置が決まらず何度も根元や幹に場所を変えて、ようやく昼過ぎに、トレーラーにクスノキを搭載しました。クレーンは自分が転倒しないように62.5tの重りを数回に分けて自分で載せたり降ろしたりして、総合図書館と医学部本館前を行き来していました。午後は、本館の南側、赤レンガ時代の法医学教室の有った場所に大きく掘られた移植用の穴に、派手な宙乗りを行いながらクスノキが移植されました。掘り起こされた土砂で出来た山には、赤レンガの瓦礫が100年の哀愁を漂わせていました。次に、総合図書館前の噴水はどこへ穴を掘りに行くのでしょうか？



トレーラーに搭載された重さ50tのクスノキ



50tクスノキの宙乗り、医学部本館前北側

(大学院医学系研究科・医学部 中嶋信)

This month's

Todai Research

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

東大の研究紹介サイト「Todai Research」の情報をお知らせします。興味のある記事はありましたか？ぜひ、サイトをご覧ください！

Todai Research で検索

Feature Story

今の特集記事

2012/6/20 大学院工学系研究科

明日の風が海に吹く

福島沖で始まる浮体式洋上風力発電の実証研究



再生可能エネルギーとして世界中で注目される風力発電は、山が険しく海が深い日本には適さないと言われていました。2012年、福島県いわき沖で、複数の風車を用いた「海に浮かぶ発電所」の実証研究が始まります。大学院工学系研究科社会基盤学専攻の石原孟教授が仕掛けた世界初のウインドファーム建設プロジェクトに、さまざまな分野の研究者と、国産企業の技術力が結集しました。

過去の記事は、Features 又は Archiveから、いつでも読むことができます。ぜひチェックしてみてください！

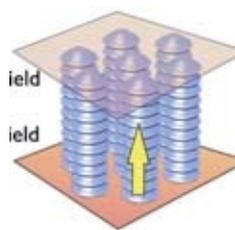
Research Highlights

最新論文紹介

2012/7/4 大学院工学系研究科

超高密度メモリー素子への挑戦

世界で初めて強誘電性カラムナー液晶材料を開発



大学院工学系研究科の相田卓三教授、宮島大吾(博士課程学生)の研究グループは、これまでに多くの研究者が試みてきたにもかかわらず誰も実現できなかった強誘電性カラムナー液晶を実現しました。この物質を利用することで、従来とはまったく異なる方法で簡単に超高密度メモリー素子作製が期待されるそうです。

過去の記事は、Highlight>Research Highlights 又は Archiveから、いつでも読むことができます。ぜひチェックしてみてください！

ご意見・お問い合わせはこちらまで

Mail : kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp Ext : 21045
東大ポータル >> 便利帳 >> 総合企画部 >> 広報課

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

INFORMATION

募集

募集

国際本部 AGS 推進室

平成 24 年度東京大学 AGS 研究会研究課題の募集

東京大学、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、スイス連邦工科大学 (ETH)、チャルマーズ工科大学による AGS (Alliance for Global Sustainability) は地球環境の保全という制約条件下で持続的な発展を求めて現実的な方策等の提言を行う共同研究を推進している国際パートナーシップです。AGS 活動を 10 年以上継続してきた現在、東京大学 AGS 研究会では、メンバー大学との連携と共に、アジアでの活動、取り分け中国、韓国、東南アジア諸国、インドなどとのサステナビリティに関する研究・取り組みを引き続き強化し、これらの国を代表する大学・研究機関との連携を推進しています。

東京大学 AGS 研究会では、今年度 (平成 24 年度) もサステナビリティに関する研究課題を募集いたします。皆様のご応募をお待ちしております。

昨年度は東日本大地震を受けまして、Full Project として、「東日本を襲った大地震・津波からの復興を契機として、新しい社会像を目指す研究」を募集しましたが、本年度は従来の研究課題募集の主旨にもどりまして、アジアにおけるサステナビリティに重点をおきながら、Full Project については、AGS の重点分野である水、食糧、エネルギー、都市の未来、モビリティ、リスクマネジメントなどの研究課題の他に、高齢化社会・持続可能性を支える文化の多様性や持続可能な社会とジェンダーの役割などの研究課題についても研究基金を配分いたします。

一方、例年どおり AGS では、特に若手研究者への支援を推進すべきと考えており、「奨励研究」(Seed

Project) として若手研究者を対象として、「将来へ向けての新しいアイデアや新機軸の研究」を募集いたします。

「Full Project」あるいは「奨励研究」にご興味がありましたら、研究課題のご提案をお願いいたします。特に、新しいアイデアに基づいた研究課題の提案をお待ちしております。また、これまで応募されていない方の応募も歓迎いたしますので、お心あたりの方にもご連絡頂ければ幸いです。

1. 研究課題応募に際しての留意点

- ① サステナビリティに関する研究プロジェクトとして採択されることを目指す研究であること。
- ② Full Project は学際性、国際性、社会連携 (注 1) のいずれか一つ以上を満たすものであること。
- ③ 研究課題用の応募用紙を用いること。
- ④ Full Project 研究は一件当たり年間 100 万円以内で 3 件程度、奨励研究は一件当たり 40 万円以内で 20 件程度の研究助成基金を配分する予定です。
- ⑤ 研究助成金については、今年度は主に運営費交付金での配布となりますが、一部 (あるいは全て) を委任経理金でお渡しする場合があります。
- ⑥ 研究代表者は本学教員・研究員で、主たる研究場所が本学であることが必須となります。特任研究員、客員研究員などの方は、研究課題のご準備に入る前に AGS 推進室までご相談、ご確認ください。来年 3 月に退職される教員の方は研究代表者となられることをご遠慮ください。
- ⑦ 奨励研究は「若手研究者」が代表となりますが、「若手研究者」とは原則として 40 代前半までの教員・研究者とさせていただきます。
- ⑧ 採択されました研究課題の研究代表者の方には以下の義務を負っていただきます。いずれもその時期になりましたらお願いの連絡をいたします。
 - ・平成 25 年 12 月ごろに開催する中間報告会での口頭発表 (15 分間程度)
 - ・平成 26 年 6 月ごろまでに 5~6 ページの報告書提出
 - ・会計報告

(注 1) 社会連携：技術や制度の社会における実践・普及を念頭に置き研究プロジェクトにおいて社会の様々な関係者と連携すること。

2. 応募ご希望の方は応募用紙をお送りいたしますので下記まで連絡をください。
3. 応募用紙にご記入の上、8 月 6 日 (月) までに e-mail でご提出をお願いいたします。

応募用紙依頼・課題申請書の提出・問合せ先

浅尾 修一郎 (あさお しゅういちろう)

AGS 推進室

内線：21548

E-mail: asao@ir3s.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第549（7月4日）号の発行
— 教員による、学生のための学内新聞 —

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第549号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

齋藤慈子：イクメンザル、コモンマーマセットの子育て
梶谷真司：日独共同大学院とシンポジウム

「ポスト3.11の日独市民社会」

今橋映子：文学・芸術と「百年の計」

——全学ゼミナールの現場から

古荘真敬：回帰する問いのアクチュアリティ

瀬川浩司：再生可能エネルギーの利用拡大に向けた次世代太陽光発電システムの開発

三ツ井崇：自己流「韓国朝鮮文化論」

——「丸かじり」の醍醐味

館知宏：コンピューショナル・オリガミとパーソナル・デザイン

齋藤希史：コマメシ——駒場の飲食店案内

角和善隆：駒場博物館 特別展「石の世界——地球・人類・科学」について

小林康一：〈時に沿って〉大人と子供と研究者

ラテンアメリカ音楽演奏入門成果発表コンサートのお知らせ

学部報委員会：学部報委員交替のお知らせ

お知らせ

本部情報基盤課

「経済学・経営学系のためのはじめての論文・企業情報の探し方」など“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤課学術情報チームでは、定期的に、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

8月は、「経済学・経営学系のためのはじめての論文・企業情報の探し方」、「RefWorksを使うには？」コース

を実施します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※学外からの利用方法はどちらのコースでも説明します。

上記の他に、研究補助担当教職員を主対象とする講習会も実施します。

（参照：学内広報No.1426の記事・P33『「秘書さんのためのはじめての論文の探し方」講習会実施のお知らせ』）

情報探索ガイダンス 2012.8

論文探しと論文整理の効率UP

予約不要

経済学・経営学系のための
はじめての論文・
企業情報の探し方

経済学・経営学・ビジネス研究分野の英語文献データベース「Business Source Complete (EBSCOhost)」と、有価証券報告書を全文検索・閲覧できる国内企業情報データベース「eol」の基本的な検索方法を実習します。

8/8(水)
15:00～16:00

経済学部以外の方も歓迎

RefWorksを使うには？

RefWorksはデータベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成できる文献管理ツール。代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

8/30(木)
15:00～16:00

本郷キャンパス
総合図書館1階 講習会コーナー

会場

パソコンを使って実習します。
ECCS 無線 LAN 対応 PC 持込も OK
各コース 先着 17名 参加費無料

東京大学にご所属の方ならどなたでも参加できます。

各コース 講習会 検索

夜間ガイダンス試行開催！
完全無料！
このページをよく読んでお申込みください。

本部情報基盤課学術情報センター担当
library@lib.tokyo.ac.jp 03-5841-2649 (内線 22649)
http://www.lib.tokyo.ac.jp/ess006/learn.htm
@ess06_todai twitter

■ 8/8（水）15：00～16：00

【経済学・経営学系のためのはじめての論文・企業情報の探し方】

初心者向け。もちろん経済学部以外の方も歓迎です。

経済学・経営学・ビジネス研究分野の英語文献データベース「Business Source Complete (EBSCOhost)」と、有価証券報告書を全文検索・閲覧できる国内企業情報データベース「eol」の基本的な検索方法を実習します。

■ 8/30（木）15：00～16：00

【RefWorksを使うには？】

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

●会場：

【本郷】総合図書館 1階 講習会コーナー 定員 17名
(ECCS 無線 LAN 設定済みのノート PC 持込 OK)

●参加費：無料

●予約不要

★授業・ゼミ・学生グループなどを対象にオーダーメイドで講習します！

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です（無料）。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでも OK です。

過去の実施例は以下の URL でご覧いただけます。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★ Litetopi メールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。（無料）



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー担当 03-5841-2649（内線：22649）

[literacy * lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy*lib.u-tokyo.ac.jp)

（*は@に置き換えて送信してください。）

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

（ツイッター http://twitter.com/gacos_todai）



お知らせ

本部広報課

広報センター夏季臨時休館のお知らせ

本学広報センター（龍岡門横）は、下記のとおり臨時休館させていただきます。

8月10日（金）～8月16日（木）

本学広報センターに関する情報は、以下の URL をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02_j.html

【東京大学ホームページ】→【右列の『広報・情報公開』をクリック】→【『広報センター』をクリック】

★なお、閲覧可能な刊行物や配布物がありましたら、随時ご提供いただきたくお願い申し上げます。

お知らせ

東洋文化研究所

写真展示「地階からの風景 F++」開催のお知らせ

東洋文化研究所の1階には、テーブルとイスでくつろげる玄関ホールがあり、多くの人が利用しています。

このたび、6月29日（金）よりさらに来館者がゆっくり落ち着けるように写真の展示を始めました。

本研究所ではアジアに関する研究が行われており、古い文献や貴重な資料が取り扱われています。所内にはそれらの資料を写真などに加工して保存するために画像技術室が設置されています。

この展示は画像技術室所属の野久保雅嗣技術専門職員が東洋文化研究所の英文ホームページ用の素材として2年ほど本郷地区を撮影したものの一部を取り上げたものです。

写真技術を学んだ学生以来の風景写真の撮影ということもあって、何を撮っていいものか戸惑ったようですが、「地階から」という表題は画像技術室が地下にあり、普段仕事をしている自分が地下から景色を見つめてみたところから来た、ということです。

広い大学の一部を鮮やかに切り取った作品が並んでいますので、ぜひご覧ください。

会場：東洋文化研究所1階・玄関ホール

開館時間：8：30～18：00

会期：6月29日（金）～8月31日（金）



玄関ホールの展示会場



三四郎池にて

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第76回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会と大学院理学系研究科生物科学専攻の共催により、第76回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、大学院理学系研究科の阿部光知准教授による、環境に応答した花芽形成のメカニズムについての講演です。植物は毎年決まった時期に花を咲かせますが、それは植物が環境からの情報を利用して花芽形成のタイミングを調整する巧妙な仕組みを備えているからにはほかなりません。この仕組みの詳細については最近急速に解明が進み、長年謎であった花成ホルモン(フロリゲン)もついに正体が突き止められました。本セミナーはこうした最新の研究成果に触れる絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：阿部 光知（大学院理学系研究科）

演題：「植物が決まった季節に花を咲かせる仕組み」

日時：9月1日（土）14時～16時

場所：本郷キャンパス内 理学部2号館 4階大講堂

参加費：無料

参加申込：今回は事前のお申し込みは不要です。

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

空間情報科学研究センター

CSIS DAYS 2012「全国共同利用研究発表大会」での発表へのお誘い

空間情報科学研究センター(CSIS)では、11月2日(金)～3日(土)に年次研究発表大会 CSIS DAYS 2012を開催いたします。一般公募による研究発表と、CSISと共同研究を進めている研究者の方々による発表が行われます。空間情報科学に関する研究の成果を広く知っていただき、産官学の連携を促進する研究交流の活発な場に発展することを期待しております。

CSIS DAYS は、空間情報科学に関する最新の学術研究動向を多くの参加者と共有できる点で非常に有意義であり、またオフラインでの研究者・実務家をつなぐネットワークを作る場としても機能してきました。

年次研究発表大会 CSIS DAYS 2012 は、4回のポスターセッション(各45分間)を基本としますが、各セッションの最初にポスター発表者全員がそれぞれ5分間で口頭発表いたします。発表にご興味がある方は、CSIS DAYS 2012のウェブサイトをご覧のうえ、是非ご検討ください。

<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/csisdays2012/>

<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/csisdays2012/guideline.html>

また、去年の発表内容は以下から閲覧可能です。

<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/csisdays2011/program.html>

研究アブストラクト(A4版 1ページ)の【投稿締め切りは9月7日(金)】となっております。優れた発表に対し、優秀研究発表賞を授与しております。皆様からの積極的な発表申し込みをお待ちしております。

【問い合わせ・原稿投稿先】

CSIS DAYS 2012 研究アブストラクト編集事務局
days12submission@csis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

創薬オープンイノベーションセンター

**「化合物スクリーニング講習会」参加者募集中。
スクリーニングを始めるにあたって—アッセイ系構築から Hit to Lead まで—**

ご自身の研究に役立つ新規活性化合物発見や創薬を最終的な目標に化合物スクリーニングを行ってみようかと考えている方々を対象にどのようなことに注意してスクリーニング研究開始に向けて検討や準備をすればよいかについて、我が国最大規模の公的化合物ライブラリーから化合物サンプルを提供し、アッセイ系構築等の支援を行っている当センターの講師がわかりやすく紹介します。また、希望者はセミナー終了後施設見学可能です。

化合物スクリーニング及び当センターにご興味のある方はどなたでも、お申込みの上、ご参加下さい。

日時： 第1回 9/7(金)13:30～(申込締切8/31)

第2回 10/2(火)13:30～(申込締切9/25)

会場： 薬学部本館

参加費：無料

定員：各回30名(先着順)

申込：当センターホームページを参照してください。

<http://www.ocdd.u-tokyo.ac.jp/>

読者投稿写真 ～東大の花～

キショウブ



文豪・夏目漱石(1867-1916年)は三四郎池に咲くキショウブを目にしたであろうか。ところで、まもなく漱石生誕150年、没後100年を迎える。それを記念して、文学碑か三四郎・美禰子像が建てられることを吾輩は切に願ってやまない。

(撮影：文学部 田中善和さん)

蓮



(撮影：史料編集所 飯塚英一郎さん)

お知らせ

保健・健康推進本部

各地区保健センター夏季の診療日程について

7月23日(月)～8月27日(月)の期間は、下表のとおり業務を行います。なお、夏季休業日は、全業務休止となります。

※診療日程はやむを得ず変更となる場合がありますので、ご利用の際には各地区保健センター Web サイトや掲示等で確認されるようお願いします。

■本郷地区 (03-5841-2575) 夏季休業日 8/13(月)、14(火)

診療科等	診療日時等	対象者
内科	受付時間：月～金 10：00～12：20	
	9：00～10：00、12：20～17：00は急患対応いたします。(8/1を除きます)	
	8/1(水)のみ急患対応は15：00までになります。	
精神科 (予約制)	月～金 9：50～12：50 13：50～16：00	学生・ 教職員
歯科 (予約制)	7/23(月)・30(月)・8/6(月)・20(月) 13：30～16：00	
	7/25(水)・8/1(水)・15(水)・22(水) 10：00～11：30、8/10(金) 10：00～12：30	
	7/26(木)・8/2(木)・9(木)・16(木)・23(木) 13：30～16：00	
	7/27(金)・8/3(金)・10(金)・24(金) 13：30～16：00	
耳鼻咽喉科	7/30(月)・31(火)・8/2(木)・3(金)・6(月)・7(火)	
	8/16(木)・17(金)・20(月)・21(火)・23(木)・24(金)	
	受付時間：10：00～12：20	
学生健診追加項目検査	日程は、健康管理室(内22580)またはWebサイトで確認してください。	学生

■駒場地区 (03-5454-6831) 夏季休業日 8/13(月)、14(火)

診療科	診療日時等	対象者
内科	月～金 10：00～12：20【※7/27までは午後も診療します。】	
	9：00～10：00、12：20～17：00は急患対応いたします。	
	8/1(水)のみ急患対応は13：00までになります。	
精神科 (予約制)	月～金 9：50～12：50 13：50～16：00	学生・ 教職員
歯科 (予約制)	7/24(火) 10：00～12：40、14：00～15：30・7/31(火) 10：00～12：40、14：00～15：30	
	8/7(火) 14：00～15：30、21(火) 10：00～12：40	
	8/3(金)・10(金) 14：00～16：00	
皮膚科	7/23(月) 9：30～11：50 8/27(月) 休診	
整形外科	7/27(金)、8/10(金) 通常時間帯	

■柏地区 (04-7136-3040) 夏季休業日 8/13(月)、14(火)

診療科	診療日時等	対象者
内科	受付時間：月～金 10：00～12：20	
	9：00～10：00、12：20～17：00は急患対応いたします。(8/1を除きます)	
	※8/1(水)のみ急患対応は13：30までになります。	
精神科 (予約制)	月～水 9：50～12：50 13：50～16：00	学生・ 教職員
	木 9：50～12：50 14：30～16：30	
	金 9：50～12：50 13：30～15：30	

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
24.6.29	牧野 浩志	辞 職（国土交通省大臣官房付）	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授
24.6.30	相原 一	辞 職	大学院医学系研究科准教授
24.6.30	井田 孔明	辞 職	大学院医学系研究科准教授
（採 用）			
24.6.16	石渡 晋太郎	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科特任准教授
24.7.1	前多 敬一郎	大学院農学生命科学研究科教授	名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授
24.7.1	SAND JORDAN ALEXANDER	大学院情報学環准教授	
24.7.1	小川 智弘	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授	国土交通省職員
（昇 任）			
24.7.1	稲山 正弘	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.7.1	月脚 達彦	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.7.1	三代木 伸二	宇宙線研究所准教授	宇宙線研究所助教
（配 置 換）			
24.7.1	広田 光一	大学院情報学環准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

02 アジア・アントレプレナーシップ・アワード 2012

NEWS

一般ニュース

- 04 本部奨学厚生課
東京大学光イノベーション基金奨学金平成 24 年度受給者証書授与式を開催
- 04 本部キャリアサポート課
知の創造的摩擦プロジェクト第 14 回交流会開催
- 05 本部学生支援課
2012 年度東京大学京都大学総合対校戦開会式開催される
- 05 本部学生支援課
第 63 回京都大学・東京大学対校競漕大会開催される
- 06 産学連携本部
一増加する契約事務をよりスムーズに一研究契約事務担当者向け説明会を開催。
- 06 本部人事給与課
名誉教授の称号授与
- 08 大学総合教育研究センター
大学総合教育研究センター・イギリスデモントフォート大学主催国際シンポジウム「日英高等教育改革の動向」を開催
- 09 附属図書館
韓国・ソウル大学校との交流に関する覚書を締結
- 09 大学院工学系研究科・工学部
世界展開力による交流事業として MIT 学生が本学を訪問
- 10 医科学研究所
第 39 回医科学研究所創立記念シンポジウム開催される
- 11 大学院法学政治学研究科・法学部
外国人留学生見学旅行を実施
- 12 大学院人文社会系研究科・文学部
第 3 回全学教職員懇話会開催
- 13 大学院教育学研究科・教育学部
臨床心理学コース主催、マイケル・バンバーク教授講演会・ワークショップを開催
- 13 生産技術研究所
先進モビリティ研究センター (ITS センター) ITS セミナーシリーズ 17 「ITS セミナー in 松山 ～次世代のモビリティ確保に向けて～」開催される
- 14 東洋文化研究所
東文研にてプリンストン大学グローバルセミナー始まる！
- 15 大気海洋研究所
海洋・沿岸・大気科学—ハワイ大学・東京大学合同シンポジウム
- 15 大学院工学系研究科・工学部
工学系等地震訓練が行われる
- 16 情報基盤センター
ボスニア・ヘルツェゴビナ国の情報教育関係者が本学の教育用計算機システムを見学

16 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生・外国人研究員等との懇親会開催される

キャンパスニュース

- 17 本部キャリアサポート課
平成 23 年度学部卒業生及び大学院修了者の就職状況
- 24 本部留学生・外国人研究者支援課
平成 24 年度外国人学生数—国費外国人留学生数 958 人、私費外国人留学生数 1,945 人、外国政府派遣留学生数 33 人、その他の外国人学生 (在日外国人学生) 数 299 人—

コラム

- 28 再生のアカデミズム<実践編> #05
- 29 ひょうたん島通信 第 7 回
- 30 決算の DOOR ～数字が語る東京大学 第 22 回
- 30 インタープリターズバイブル vol.60
- 31 Crossroad 産学連携本部だより vol.80
- 32 Policy + alt vol.34
- 33 ASIAN DIVERSITY No.21
- 33 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第 77 回
- 34 コミュニケーションセンターだより No.90
- 34 救援・復興支援室より No.14
- 35 噴水 重さ 50t クスノキの宙乗り

INFORMATION

募集

36 国際本部 AGS 推進室
平成 24 年度東京大学 AGS 研究会研究課題の募集

お知らせ

- 37 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 549 (7 月 4 日) 号の発行—教員による、学生のための学内新聞—
- 37 本部情報基盤課
「経済学・経営学系のためのはじめての論文・企業情報の探し方」など“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 38 本部広報課
広報センター夏季臨時休館のお知らせ
- 38 東洋文化研究所
写真展示「地階からの風景 F++」開催のお知らせ
- 39 大学院理学系研究科・理学部
第 76 回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 39 空間情報科学研究センター
CSIS DAYS 2012「全国共同利用研究発表大会」での発表へのお誘い
- 40 創業オープンイノベーションセンター
「化合物スクリーニング講習会」参加者募集中。スクリーニングを始めるにあたって—アッセイ系構築から Hit to Lead まで—
- 41 保健・健康推進本部
各地区保健センター夏季の診療日程について

事務連絡

42 人事異動 (教員)

淡青評論

44 昼休みの効用

◆表紙写真◆

開花してからはわずか 3、4 日で散ってしまう美しい蓮。田無にある農学生命科学研究科附属生態調和農学機構にて



七徳堂鬼瓦

昼休みの効用

大学院生だった1970年代後半、イタリアに留学した。斜塔で有名な町にあるピサ高等師範学校（Scuola Normale Superiore di Pisa）である。その名前の示すとおり、元来はイタリアの中学・高等学校で教える教員を育成するための学校であったが、徐々に、専門研究者養成のための教育研究機関としての性格を強めていき、今日にいたっている。創立は1810年、パリ高等師範学校の姉妹校として、当時この地に効力を発揮したナポレオン令に基づいて設立された。いわゆる大学ではないが、すぐれた教授陣を擁し、学部と大学院レベルの学生を入学試験によって選抜し、徹底した少数精鋭教育を実施している。文学者カルドゥッチ、物理学者フェルミなどのノーベル賞受賞者をはじめ、共和国大統領、首相を含む人材を各界に輩出している。入学者数は学部段階で、人文科学中心の文系クラスと数学・物理学中心の理系クラス合せて5～60名ほど、東大入学者の数十分の一に過ぎない。入学者は学生寮に個室を与えられたうえ、部屋の掃除や洗濯もしてもらえ、食堂も完備。これら食・住の費用に加え、学費も無料、奨学金まで全員に出るので、学生は勉強にだけ専念すればいい、という仕組みである。ただし、毎年、要求された学業成果があがらないと、容赦なく放校される。しばらく前に、この学校と東大との間で学生交流を含む学術交流協定を結ぶ交渉を行ったときに、先方から、東大からの学生は住居費も食費も無料で受け入れる用意があると言われたが、東大ではとてもそのような待遇ができないので、互惠平等の建前から、涙を呑んでお断りするしかなかった。昨年の東日本大震災に際して、見舞いのメールや電話をくれた多くの外国人には、ピサ留学時代の友人も混じっている。彼らとの30年以上に及ぶ交友関係を築ききっかけとなったのは、授業や食堂で顔をあわせたあと、夕方4時頃まで続く長い昼休みを利用して、近くを散策したり斜塔のある広場の芝生に寝そべったりしながら交わしたおしゃべりにあったような気がする。この4月から50分に短縮されてしまった東大キャンパスの昼休みから考えると、夢のような時間であった。

長神 悟（大学院人文社会系研究科・文学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1427 2012年7月25日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>